Wason
HQ
..4
J74t

Dec. 1890
no. 244

女學雜誌

明治二十三年十二月二十日
第二百四十四號
一册六錢。毎土曜日發兌

誰が栽し菊　中島俊子
十九世紀の勳爵士
青年の怪風　無名氏寄

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 244. DECEMBER, 20TH. 1890.

EDITORIAL :—Arise, ye Chivaliers of the 19th Century!

MISCELLANEOUS :—What girls should know to make themselves virtuous. (Matsumura Kaiseki). On leaving home for a change. (Unposhi). An Essential element of Happiness. (Hanachiru Sato).

HOUSEHOLD SCIENCE :—What wives shought know. (Nakashima Toshiko). A talk by the fireside. (Sanka sekio).

NOVEL :—"Danchō" (Misao.)

PHYSIC :—"Balloon." (Yoshida).

CRITICAL NOTES :—Mr. Fukuchi Ichiro.

CHIDREN'S COLUMN :—

LITERATURE :—A Several Japanese Poems. (Anzashi's Society of Tokyo). The Emperor "Godaigo" defeated on mount Kasagi. (Taiheiki). How to make Japanese Poems (Kaoru).

HUMOROUS:—"A Supernatural Law," (Toyoko).

NOTES AND NEWS :—The Spring of Parliament is at hand. Church and Girls.)

CONTRIBUTED ARTICLES.

CONCERNING WOMEN.

第二百四十四號目次

- 社説　十九世紀の勳爵士起てよ
- 雜錄　女子德を修むるの心得（松村介石）●養痾の門出（雲峯子）●東京電話交換所女工●幸福の要素（花ちる里）
- 家政　夫人の心得（三）中嶋さし子●爐邊雜話（山下不翁）
- 小説　斷腸（中の三）みさを
- 理學　風船の話（其二）吉田伸子●其他三件
- 批評　福地源一郎氏●無邊俠禪
- 兒鑑　人の花は赤い（ふみ子）
- 文學　和歌數首（東京案山子の家社中）●後醍醐天皇笠置山を落ち玉ふ（太平記）●和歌を作る事（かほる）
- 笑草　理外の理（さよ子）
- 隨感　誰か栽ゑし菊（中島俊子）●婦人傍聽（三美鄕女史）
- 問答　數件
- 寄書　近江の長濱にて内田君新婚の莚に侍りて（郁山人）
- 時事　議會の春近し●教會と女子●一致教會の女幹事●廢娼の聲四方に反響す●自由黨内の廢娼論●晉士亞人●東京の飲水●女學雜誌改進●社員の傳●金玉均氏著述
- 新誌
- 通信
- 女報
- 通報

THE "JOGAKU ZASSHI."

THE *Jogaku Zasshi*, as stated in one of our recent weekly summaries of the vernacular press, entered upon a new career of enterprise on the day of the official opening of the Diet, the 29th ultimo. Mr. Iwamoto Zenji had previously held almost sole charge of the editorial department, but henceforth much of the editorial work will be undertaken by lady writers, eight of whom have been newly engaged. The discussion of current topics will be in the charge of Mrs. Nakajima, wife of the President of the House of Representatives. It will be seen that she has every facility to be well acquainted with the passing questions of the political, no less than of the social and literary world. Moreover, she will publish from time to time short poems especially addressing herself to her own sex. Mrs. S. Wakamatsu, and Miss Tanabe will devote themselves to the writing of novels. Mrs. Ogino, who is well known as a distinguished graduate of the Female Normal School, and as the first lady physician in Japan, will write on the subjects of hygiene and the nursery. Scientific subjects will be treated of by Mrs. Yoshida, also a well-known graduate of the Female Normal School. Miss Ando, one of the first graduates of the shorthand writing department in the *Meiji Jo Galcko*, will have the charge of the reporters' department while Mrs. Kojima, who is said to be an enthusiastic student of domestic economy, will discuss subjects relating to her speciality, and will write religious stories for children. Lastly the editing of the paper will be under the general superintendence and responsibility of Miss T. Shimizu. Mr. Iwamoto, we are told, will continue to have connection with the journal. In announcing these changes, our contemporary reviews its position in the past and declares its policy in the future. The object of the *Jogaku Zasshi* has been, ever since the commencement of its existence, to be a reformer and leader among all the periodicals devoted to the interests of the fair sex. It has never sought a large sale by catering to the prejudices of society. This object, we are assured, will never change, but a critical moment has arrived in the history of the movement for the elevation of women's position in Japan, and a new responsibility has developed upon the *Jogaku Zasshi*. At one time female journals numbered more than ten in the city of Tokyo alone, but they have disappeared one after another until now there remain only three. One of these is Buddhistic in principle, while another is entirely literary, and has no fixed principle. It is scarcely necessary to add that the third is Christian. Simultaneously with this decline of the female cause in the journalistic world, things have been taking a similar course in the sphere of female education. Under these circumstances, the *Jogaku Zasshi* thinks it necessary to return to the first days of its existence, and repeat what it then wrote as to the vital importance of promoting female education and elevating the position of women. Our contemporary also promises to publish a large monthly supplement containing elaborate essays on various subjects interesting to women. Judging from the numbers before us, the columns of our contemporary have become far more interesting in many respects, and we hope that its disinterested enthusiasm may meet with the warm support of every one in sympathy with the cause it champions so stoutly.—*Tokyo Mail, Dec. 16. 1890.*

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第二百四十四號 明治二十三年十二月二十日發兌

社説

十九世紀の勳爵士。起てよ

滿天下善良なる男生諸君、並に温雅淑貞なる敬愛すべき姉妹諸君。先づ左の驚ろくべき一篇の投書を見よ、

（參考。寄草者の宿所は本社編輯局に明記し在る也。）

左に記する處は生が親く遭遇する處にして、近頃書生輩の惡風日に増長したるの一般を窺ふに足るべければ、敢て貴紙の餘白を借り、以て之れを江湖に告げ、今に至りて之れを改良矯正するの必要なることを注意せしめんと欲す、而して之れを貴社に寄する所以んのものは、事婦女に關係すること多ければなり。貴社請ふ微意を察して、沒函底の鬼となすことなくんば幸甚。

Y. K. 生 再拜

女學雜誌記者巖本善治君玉机下

Y.K.生去る十一日黄昏晩餐を喫し了り、所用を辨ずるが爲め、寓を出で、富士見町四丁目の堤畔（俗に蛙原と稱し今工兵會議所を新築せし側）を歩す。時當に暗黑、堤畔に沿て行くと僅かにして、三四の男聲あり。其云ふ處、婦女を愚陋するもの丶如く、汚穢にして聞くに堪ず。漸く近くに従ひ、履聲を收めて凝視するに、三ヶの男影と一ヶの女影を認む。謂ふに、惡少年等の途行く婦人に戯る丶なり。咄々何等の怪事ぞ。竊に尾して彼等の音聲と風貌とに依て察するに、十七八の三書生、芳紀二八に垂んたる一女學生を躡しつ丶、戯れ且つ冷評するなり。一歩は一歩より、罵詈を募り、一聲は一聲より汚調を極む。既に蛙原の中央に至る頃は、愈々寥寞となりければ、他に人なしと思けん、惡戯愈々増長し、言語の戯れ今は傍若無人の擧動と變じ、惡少年等互に排擠して、特更に少婦の躰に突當り、或は醉漢の狀を眞似、蹌踉として躰を少婦に委ね、其屢々顚倒せんとする毎に、呵々と大笑し、終には手を伸ばして婦の臀頭を摩し、又は其細腰を擁する等、其無狀默視するに忍びず。此時少婦の狀は、宛も屠所の羊の如く、口云ふ能はず、躰避くる能はず。逃げんか、追捕せん。亻立せんか、突き倒さん。泣かんか、愈々戯ふれ辱めん。怒らんか、愈々暴行を加へん。援を呼ぶも人家遠くして、聲音達せず。助を招くも暗黑且つ人なし。其心衷抑も如何んぞや。太閤の如き豪傑すら、世に馬鹿程恐ろしきものなしと歎ぜり。然るに人跡恰んど絶へ、目を遮ぎるものは延々たる長堤のみ、耳に觸るものは凄々たる松籟のみ、而も暗黑冥々の時に於て、此三馬鹿に遭遇す、有髯男子すら尙ほ畏縮せざる能はず、

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

况んや此少女をや。其畏懼實に察し遣られて憐れなりき。此少年等、白色の屁平帯を結び下げ、高履を穿つを以て見れば、是れ又た後來に大望を有すと自稱する、書生輩の一人なるべし。然るに其亂暴斯くの如く、明暗を以て行ひを分てり、其末知るべきなり。都人、書生てふ語を亂暴者の異名と思ひ、三才の童子も、無頼漢を見れば指して書生さんと呼ぶは、無理ならぬとぞかし。生亦一ケの寒書生、志ざす處、學ぶ處、共に之れを異にすべけれど、類名より推せば、彼惡少年と肩を列すべき一人なり。思ふて茲に至れば、實に汗顔の至りに堪へざるなり。噫若し此輩にしてあらずんば、世人の學生を卑む斯くまで甚しかるまじ。曰く男書生、曰く壯士、曰く車夫は當世都人の最も嫌忌する好三幅對にして、就中書生其冠たり。蓋し書生必ず亂ならずと雖も、一犬狂なれば萬犬狂視せらるゝは、勢の然らしむる處、而して數に於て書生の最とも多きは勿論、壯年血氣の輩も亦書生に多く、而して屁理屈を叩く者も、亦他の二者に比して書生に多しと云はざるべからず。噫兇惡暴行を爲して恥ぢざるものは、全書生中其數寥々恰も曉天の星の如きあり。曉天の星に比すべき僅少の惡漢、能く全書生の名譽を毀け、聲價を卑くゝす、惡みても尚ほ餘りあり。今夕の如き好機、宜く一棒を加へて將來を警むべきなりとは、該時生の心頭に現出したる一個の感情なり。此時宛も、一少年臂を延ばして、少婦を擁せんとしたりしかば、生自ら不知不識の中に身を挺し、藤杖を揚げて力の限り彼れの猿臂を打ち下ろせり、彼等は不意の襲撃に喫驚したりけん、苦痛の叫聲を一張したるの外、蕭然として靜かなり。生之を顧みるに遑あらず、少婦を扶けて疾く去らんとし、十數歩を過ぎし頃、野郎俟て、の聲を跫々の響に和し、二名の惡少年走り來り、瓦礫を飛ばして生の右脚を傷けたり。生止むを得ず、少婦を背後に擁し、杖を揚て將に奮闘せんとするの際、幸にも一輛の腕車ありて。牛込門の方より馳せ來り、兩漢を逃去せしめたるを以て、生は僅かに厄を免れ、少婦と共に牛込門外に出で去りぬ。此日や、神樂街毘舍門の齋日にして、溝外星舗臺を連ね、燭燈燦爛として、白晝を欺き、人衆絡繹として雜踏を極む。生少婦に別を告げて曰く、僕卿を家に送らんと欲すれども、既に此人あり、復た暴人なかるべし、若し貴宅まで尚ほ寂街の隔るあらば、請ふ轎を雇はれよ、僕所用あり、故に此處にて分袂すべし、

と。少婦其住所姓名を告げ、懇ろに謝しつゝ敢て生の住所氏名を叩ず。然れども生之れを告ぐるを屑しとせず、強て之れを包みて分る。聞く、此少婦は學校の歸途、友人の許を訪ひ、其饗應に因り、圖らず遲刻せるなりと。世の父母たると否とを問はず、桃期の處女をして夜中獨行せしむるとは、宜く戒心すべきなり。

生敢て人を傷け苦むるとを好むものにあらす、然れども時機の止むを得ざるに會せば、又之れを爲すとを辭せさるなり。何となれば、是れ道徳法律共に許す處なればなり。特に今夕の擧たる、公明正大にして、惡少年を傷けたるは、惡少年を傷けたるにあらす、少女を耻辱の中に救ひたるものなるとを信ず、故に右脚の創、今や深く痛みを感すと雖ども、胸中怡々たり。既にして所用を了へ、寓に歸らんとし、途友人の舞踏を九段坂に見に行くに邂逅す。盖し九段坂の勸業場創立一周年の紀念として、祝典を擧げ、昨今の兩夕、舞踏の催あるなり。生友人の勸誘頻りなるを辭し難く、共に歩して九段坂の下に出で既に出づれば、流石に廣き往來も、見物人を以て充滿し、其間を縫綴して歩する間に同伴を失ひたれば、之れを搜索せんと欲するも、亦た得べからず。玆に於てか、生獨り舞臺の前面に至りし、群衆に押されつゝ、何時の間にやら舞臺間近に至りたり。此時生の前面少しく右に當りて、十七八齡の男書生七八人、一團躰を爲し、喧叫、左も無遠慮なり。山姥の劇を演ぜし時、金時の打扮を見て、マンキーと叫びたる處を以て察すれば、盖し神田邊の英學書生ならん歟、又少し左に當りて、一群の女書生あり。男生の眼線は常に舞臺を外れて、女生の一隊に注射せる狀、實に可笑氣あり。加之、時々耳語しては、協同して女生の方に壓搾を試む、玆に於てか人波忽ち四方に傳播し、亦た止むべからす。想ふに、彼等は、女生の觀劇を妨害して、自ら愉快とするものならん。然れども彼等は少しも舞劇を見ず、唯だ女生を苦むるに孜々として、其畫策に苦慮焦心す、是れ人を苦めんとして、却て自ら苦むものある歟。然れども女生輩の彼等の妨害を受くるとも亦た淺少にあらされば、終には其暴力を避けて、生の左側及後面に來り、生を狹さみて、其屛障とせるものゝ如し。玆に於てか彼惡むべき惡少年は、自己の前面に空地を餘しつ

ゝも、生の方に壓し來れり。生豈亦之れを支へざるを得んや。此の時、彼等が舌足らぬ英語を交へ、（生解得ぬと思ひしものゝ如し）低聲に相議し曰く、此の男(生を指す)吾輩の力を壓へて彼女の藩塀となれり。曰く相協力し此男を壓し倒せ、影響自ら彼女に及ばん。曰く否な此男の背後に廻はりて、彼女を壓迫せよ。曰く然るときは此男前に靜然たるを以て、忽ち僕等の仕事なるとを看破され、面白からず。曰く然らば吾等二隊に分かれ、此男を前後に狹さみて、一時に後方に壓搾せん。曰く是れ上策なり。曰く愉快々々速に實行すべしと。以上述ぶる處は、惡少年が女生を苦めんとして、焦慮するの一斑を描出せるものなり。其愚や實に笑ふべく、其痴や實に憐れむべし。既にして彼等二名、生の背後に廻はりたれば、生既に彼等の相談を聞知するを以て之れを支ふるの面倒あるを察し、且つ右脚に負傷のあれば危きに近かよらざるこそ善けれと思ひ、背後の一少年に告げて曰く、君よ、爾かく押し度くば、予が前に出でよと。排して此處を出で去りぬ。必ずや後に在りし憐れなる女生も亦た終に彼等の犠牲となり、觀劇を果さずして出で去りたるならん。

同胞諸君、右の一文を讀みて何如に感想せらるゝや。抑々如此き事は今の都門に珍らしきとにあらず。左れど吾人は今更のやうに思ひて、憤慨痛歎の念ひ禁じがたし、腹腸無限の悲しみをもて裂けなんとす。今の都門に珍らしからずと云はゞ、定めし驚く所の人多かるべし、左れど實に男書生の過半は腐れ居る也、而して此等の男書生、狼の口を開ひて女學生の墜落を歡迎せんとはなす。あゝ今の時ぞ、十九世紀勳爵士の憤然起つべきの時なれ。諸君淸淑秀貞ある女生諸子を救ひ亦以て有爲男青年の潔白を天下に告白すべし。老紳士は老ぼれて慾に耽り、議員亦た黄白病に感ぜんとす、賴むべき男女青年にして此上墜落せば、それ此大日本を何如せんや。

併せて世上の女學生諸君に告ぐ、異日若し不敬無禮なる出來事あらば一々本社に通知せよ、吾人は諸君が名譽を保護し、一切諸君に迷惑を掛けざると共に正義伸張の爲に十分の盡力を爲すべし。暴行者の名を公掲するは言ふ迄もなく、同志訴訟の一法を組織し、訴へんとして便りなきものゝ爲に、自由代言の勞を執るべし。

四

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

言行

○婦人の生命　ロバート、ブローニン夫人の詩に、女は母となることによりて好き人となるのみにあらず、實に母となることによりて生くるなり。

○女學生家政　アダムス嘗てベーコンが母の妹ミルドレッド夫人を評して云へらく、彼女は驚ろくべき學藝と非常の才識とを有しぬ、左れど之によりて良妻となり賢母となることに毫末の妨げあらざりきと。

○內助！內助　妻を娶りて事業の助け手と爲さんとする者あり、如此き人は其人を愛の爲に娶るにあらず事業の爲に娶るなり。アウロウ、レーはラムチーが申込みを謝絶して言へらく、

ラムチーよ、君が愛し玉ふものは一個の婦人にあらずして一個の事業なり、君は妻を求め玉ふにあらずして助け手を要め玉ふあり、君が望みは君が目的を助くる人の得たきにあり、婦人に於て何も望み玉ふ所ろなし。」

○吉野山入にし人の音せねど夕べの鐘にありかをぞ知る　定家

雜錄

女子德を脩るの心得　松村介石

第二種　脩德に意を留めぬ人（下）

（第二）慳吝身勝手　敢て人を怒らさんと欲するにも非ず。又之を陥れんと計るにもあらずと雖ども。唯だそれ脩身に意を留めず。慳吝の性に誘はれ、身勝手の私情に惑さるゝより。自から人を無情に附し去り。下を疎んじ。上に媚び。而して貪慾を是れ謀る。之を此種の人物とす。爰に或人の妻ありけり。其性決して佞惡に非ず。而かも慳吝身勝手の性を有しける。或時一個の客ありて。遙る〳〵遠方より訪ね來る。蓋し夫の知友なり。サレバ夫は大に喜び。酒よ肴よと馳走を命じ。彼を歡待すること頗る篤く。曰く。今夜は必ず一泊せよ、若夫れ都合惡しからずんば。數日我家に止宿せよ。久々快談を樂まんものをと。而して其意を妻に通じぬ。然るに妻は喜ばず。赤く頰を膨らせて答もせず。漸々彼方へ去り行けり。夫は憤然腹立しと雖も。かねての氣質を知るを以て。涙を呑て之を忍びぬ。サテモ知友を留めしが、家内の取扱ひ快ちよからず、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

知己は數日滯在して難有迷惑にぞ困り入りける。何となれば主人は滿腔の愛を攄へて。我身を欵待するあると雖ども。細君は至て冷淡に。下婢は極めて不注意に。余を厄介物と思ふが如くにて。家内何となく温かならず。誠に窮屈を感じたればあり。於此乎去り。去て之を一友に語り出でしに。其友驚いて答へて曰く。能くそれ數日も滯在したれ。余は一飯だも未だ曾て彼の家の惠に與りしとなし。實に某君(彼の妻の夫の名を呼び)は禍哉。彼は濃情博愛の君子なり。是れ能く君の知るところ。然れども彼の妻を娶りしより。性情殆ど一變せり。君未だかの妻君を知らざるか。其少恩無情にして吝嗇一遍の女性なるとは。天下恐くは知らざるものなからん。たとひ食時に至るとも。一飯を客に勸めたるとなし。金庫を匿して泣事を述べ。終日ケチ〳〵下女を叱す。こゝを以て下女は一月も留まらず。友人は更に近寄らず。隣家は擧て交はらず。滿庭荒涼春なほ燒原の秋色を呈す。嗟呼。某君は禍哉。若や余にしてあらんには。殆ど一日もたまりえず。鬱々遂に死するに至らんと。

又或處に同種同類の人ありけり。彼は貧者を蛇蝎視し。之を驅て近かよせず。たとひ親戚朋友なるとも。窮困の人と視るときには。言をも交へず。通り過ぎ。たゞその救助を乞はれんとを是れ恐る。然りと雖ども若夫れ富貴の人ならんには。たとひ疎隔の仲なるとも。滿伏歡迎。たゞその鼻息を是れ窺ふ。彼は物を貸すとを好まず。而して猥りに供るとを好む。彼は他人に襤褸をも與へず。而して我子に綾羅を購ふ。彼は慈善の爲めに厘毛を惜む。然れども身勝手の爲めに千金を擲つ。嗟呼禍哉此人や。

(第三)不注意恍惚　敢て不禮を好むに非ず。敢て惡意を挾むにあらず。然れども平生脩德に心なきより。往々女德を敗るものあり。即ち扣ゆべきところへ差し出でゝ。猥りに多辯を弄するもの。出づべきところへ出ずして。密かに奧へ隱るゝもの。玄關に直立して客に對し。知らぬ眞似して拜禮を避。言辭の卑俚を恥とせず。動作の無禮あるを患とせず。或は學問を鼻にかけて。醜くゝみゆるにも氣もつかず。或は人を愚弄して己れが爪彈にあふをも知らず。客あり逗りて食時を過ぐ。然れども爲めに食事を勸むるを忘る。家計將に傾かんとす。然れども敢て節約を守るに意なし。或は人に嫁して后。猶純然たる書生風を保ち。或は商家の妻たりながら。猶横柄官員的の奥樣を氣取る。塵埃室に堆かまると雖ども。洒掃の

勞を取るに懶く。惡草庭に滿ると雖ども。艾拔の人を傭ふに意なし。客あり來り。酷暑に困しむ。然れども之に團扇を供ふるを知らず。若くは氷水を勸むるを知らず。夫外より歸り。脫衣を散ず。然れども。之を放棄して顧みず。庖厨は汚物にみちて臭氣鼻を穿てども。之が洗淨に從事せず。雜具滿家に横はれども。更に之を棚箪に收めず。然而して倘ほ且つ欣揚得意の風あり。嗟吁何が故にそれ然るや。曰く。彼等は修德に意を留めず。女道を守るに力を用ゐず。從て義務の觀念に乏しく。遂に己惚不注意となり。而して此處に陷りしなり。

養痾の門出（上）

雲峯子

嘗て志を抱ひて學窓に入りぬ、何人か志を成さまく望まざらんや、余亦望めり、今尙望む、英意遐志未だ嘗て緩まず、前途遼々たるを思ふて樂みに堪へざりき、人智淺薄知る所狹しとは云へ、圖らざりき、不時の病魔に犯されんとは、誠に禍の到る、先兆なく、盜賊は思はざるに來る、一日心常の如くならず、醫を乞ふて診察を求めぬ、嗚呼醫の一言、落膽亦失望、心事空惚たるもの久しかりき、醫告げて曰く京地黃塵厚し、居るべきに非ず、閑靜幽邃の地に去り、水山清明の境に身を養へと、實に止むを得ざりき、家を喪へる孤狗の如く鬱々養痾の途に上りぬ。

滊車に乘りつ、窓外を顧り見る、一人の知れる人なし、互に送り送られつ、懇々別辭を更はすあり、笑談囂々未だ羇愁を知らざるが如きあり、うたひさゞめくあり、喜ぶあり、眠むるあり、樂しげなるもの限あらざりき、心爽かに、氣快く保つをこよなき養ひと云はれける醫の言、未だ耳底を去りしに非ざりき、如何ともし難かりし、愁感群起遂に理性を壓せしを、首を垂れて物思ひに沈みけり、斯くては病愈募らん、如かず、車窓を打眺めて山川に目を注ぎ、消愁の媒とせんにはと、心づきぬ、暮るゝも早き秋の日、漸く遠望視力の外となりぬ、空打くもり、雨もふるべく見え、小田の案山子にあく百舌の聲身にしみ、心なげに耕やす賤、心易げなるぞ羨やまれける、常は勇ましく聞えつる滊笛の音も打沈める心地せり、見るかげ、聞く音、樂しきはなかりき、ときに發する長息嘆聲、傍の人、怪しげに見るも切なかりき、人生れて死なからんや、されど人生を欲するの心亦自然の情、遂に抑へ難かりしを

如何にせん、人は知らざりけん、余が心に抱きし萬斛の愁へ、
竊に注ぎし千行の熱涙、
ゆく汽車の窓より見つる山川の
　過ぐるも早き我世なる哉

未だ句調はず、意熟せず、感ずる餘り、獨詠せし所斯の如くありき。昔は云へり、人の死せんとするや、言ふ事よしと、我は思へり、よく云ふ事あきは天倘時を余に假すにやと、自ら惟へらく門出の時懷になしける詩集一卷、是なん散鬱の好侶、當に採つて吟ずべしと、即ち勇を鼓して、高聲に吟出す、傍人驚ひて余を注視せり、されど遂に知らざりしが如し、余の心、人何時か安らかなる、無心の如きは夫れ無智の故か、世路疾く盡くるを悟れるもの幾人ぞ。

東京電話交換所女工

ふみ子

龍の口の東京電話交換所には、女職工を使用なし居ると聞き、將來此業の追々昌盛さかるに至らば、我女職界に如何なる影響を及ぼすべきや、參考の爲め其摸樣を一見し、詳細の事柄をも、聞知せばやさ、曾て一覽を乞ひしかども、創業の際にて許されざりしが、去る十三日は幸にも、先方よりの案内を得たるを以て儂行きて見來りぬ、依て其概略を記して、世の姉妹方に告げまつらん。

就職の摸樣

は別に勞働仕事とは見へず、電話器の前に、腰掛たるまゝにて、絶へず電機器に注目し、其報告に依りて、甲と乙との談話を傳へしむる爲め、其電線を接續するのみなり、故に眼と手先との外は別に働きを要せず、只右耳に聽音器を附しにて、加入者より傳話を請求し來りたる際、何番へと問ふ切りにて、其媒介の爲に耳と口とを要するなれども、之れも電線を甲乙の間に接續せしめたる上は何の世話もなく、談話の終りし報告を竢て、其線を遮斷する迄の事なり、左れば此技術は毫も六か敷ものにはあらず、只手早く耳敏くなる樣熟練さへすれば、宜しとの事なり、然し他の仕事とは違ひ、少しも時間を定むる事出來ず、いつ何時電話を請求し來るやも知れざれば、一分時も其電話機の前を去る事能はざる爲に食事する間も寛やかに食するといふ譯には行ず、互に代り合ひて用を足すあり、儂が參觀し居たる間は卅分にも足らざりしかども、其間にても請求者續々あり三人の女工少しも手を休むる暇なかりき。

女工の年齡

は十六七歲より二十歲位と見受けたり、規則は十五歲以上、

二十五歳以下てふ定めなるよし、聞く所に依れば、年齢の若き方、萬事敏捷にて宜しとの事なり、而して又此仕事は、

男子よりも女子の方、手ばしこくて宜しといへり。

練習は大凡そ二週間を要す

見習も亦二週間にて足れりとの事也。目下女工の數六名男工二名都合八名にて、絶へず三名宛出勤し、三百軒の加盟者に對して日々千ほどづゝの件を取扱ひ居れりといふ。

勞働時間は

午前七時より午後二時迄三名（女工）午後二時より仝八時迄三名（女工）仝八時より午前七時迄二名（徹夜男子）にて取扱ひ居れり、此割合を以てすれば、百軒に付一人宛を要するの都合なるを以て、餘程盛大とならずんば女職社界に大なる影響は及ぼすまじと思はる。

給料は大抵

日給十五錢宛なりと、亦以て其業の容易なるとを思ふべし、要するに、此仕事は、大人の婦人よりも、寧ろ十五六歳の少女に適するが如く思はる。

○幸福の要素　花散里

佛國大統領カルノー氏の祖父カルノー氏、及魯國小説家トルストイ伯の定めたるものと、對照すれば左の如し、

カルノー

(一)健康
(二)獨立ノ境遇
(三)仕事ニ向テノ趣味
(四)價値アル人ヨリ貴ラルヽヿ
(五)交際社會ノ愛嬌
(六)才智
(七)事務上の知識
(八)中和ニシテ欲少ナキヿ
(九)不幸モノチ助クル傾向
(十)愛ラシキ女ト伴フヿ

トルストイ

(一)地及ソノ植物動物ト相近ヅキ相馴レテ露天ニ生活スルヿ
(二)管キ食味及睡眠ヲ來タス可キ身體ノ勞力
(三)賢妻ニ親睦セル家内ノ生活
(四)自由ニ親切ニ互ニ往來交際スルヿ
(五)健康及自然ニ苦ナク死スルヿ

余は又一歩を進めて左の如く定む可し、

(一)我愛せし女と夫婦となる事
良妻は汝の神に求めよ彼は天の與ふる最美なる賜物なればなり（マルチン、ルウテル）
(二)家内の親睦
ホームは天國の影也（ボルンス）
(三)健康生命は活るに在るに非ず健なるに在り（マルテアリス）
(四)人間の職分を盡す事
人の人たる道を盡すは即幸福を得るの法なり（セチカ）
(五)正直　正直は最善の方便なり
(六)寡欲　極めて欲する所少なき人は最も神に近きものなり（ソクラテス）
(七)交際社會の愛嬌
人は交らざれば死す（ベーコン）
(八)慈愛心
たゞ愛せよ、たゞ愛せよ、（ロヘ子）
(九)四圍の外觀我快樂を遮らざる處に生活すると惣てのもの吾に好からざるなし（ボウロ）
(十)悔悟
神は悔悟を人類の美德とふせり（ボルテール）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

家政

夫人の心得（三）

家を樂しくするの覺悟。

中島俊子

世の中意の如くならずとは、古よりいふ語なれば、古人も多くは世をたのしく送らざりしものたるを知るべし。然れども、徒に意の如くならざるを以て痛苦にのみ感ずるは、不平の極度なるべし。痛苦に感ずるの病をして增長ならしめば、極めて些細なる事までも、大なる痛苦とかんずるなるべし。己れ先痛苦に襲はれなば、爭で他人の痛苦を慰むべきぞ。平素痛苦なき時は、最も快樂多きの日と思ふべし。若し痛苦あれば、これぞ常に貯蓄し忍耐を用立るの日と思ふべし。日々勉むるときは、遂に區々たる小乾坤を穿破して、終年樂園に倘徉し、花なきに花を弄し、月なきに月を觀るの心地するなるべし。人新世帶に新住せしときは、百愁頓に消し、千歡忽ち生じ、殆ど肉動き、魂飛ぶまでたのしきものなり。されど、日を重ね月を經るに隨ひ、氣儘くべき事、眼頭を圍み、心飛んで身邊より離れんとするの大波瀾も、出來るの覺悟なかるべからず。この大波瀾も、眼を轉じて觀れば、實に潺々たる音、靜かなる谷間の淸流に齊しきものたるを知らで、慌てふためくは、多年學びの窓に日を送りし者の耻べき事たるべし。元來家を治むるの要、種々あるべけれど、先第一、家族をして快樂の溫湯に浴せしむることそ、其が眼目たるべけれ。家族をして快樂の中にあらしむるは、おのれ直接に快樂を貪ぼらざるにあるなり。若己れ先んじて快樂を得んとせば、自ら我儘の處置を免かれざるなり。我儘ならではたのしからずと爲すものは、眞に家人を愛せざるものたるべし。眞に家人を愛するものは、容易に我まゝを犧牲にするを得べし。先家人をしてよろこばしめ、おのれその歡びをよろこぶにあらずして、家族の歡ぶをよろこぶにあるなりとの覺悟をして、動かざらしめば、世の猛き雨、烈しき風も、一家の平和と健康とを破ぶるの力なかるべきか。芽出度限りにこそある。

夕鶉　星溪居士

眞野の江の波間に月の影見えて夕淋しく鳴くうつらかな

暮秋紅葉

谷川の流にうかふもみち葉は秋の乘り行く筏なるらん

爐邊雜話（三）

山下石翁

對話朗讀

スルト、あの方が斯ふ仰しやいました。「ムニヤ〲〲」。デスが、あなた夫では濟みませんでは在りませんか。私しが申しまするには、アナタえ、夫はお間違へでありましやう　アチ全體、物と云ふ者わァ、向ふで斯う出ればコチらも斯ふと出る者ですからア。アナタが、ムニヤ〲、コナタが、ムニヤ〲

御婦人が、他の人と話したことをお話しにある時は、話しの道線を一々繰り反して、夫は〲少しも漏さない。實に感心なものです。然し聞く方では實に困るもので、凡て人の對話の朗讀を聞くやうです。之は婦人の性質が綿密な故でも在ましやうが、話しはツマリの所ろを話せば分るものです。左樣一々線道を話すときは、末代の人が一つの事を言ふには、殆んど百年もかゝるやうに成ましやう。男が女の方々とお話しを仕て、直に感ずる困難は之です。

まいらせそろ

一つ申上まいらせそろ、此のまいらせそろは本當のまいらせそろに御座なく候、次に認め候まいらせそろが、本當のまいらせそろに御座まいらせそろ。

手紙の文言に見ゆる之も、矢張り前と同じ所から出ます。

小說

斷腸 中（二）

みさを

今父上に答へ奉らんは恐れ多し、されど云はでは遂に事果つ可からず、父上許し玉へと、云ふ内にはや滴る双眼の涕涙、如何に昔の習俗なればとて、斯程迄女子の意見の行はれぬは、嗚呼そも何事ぞや、今や女子の社會は改革の時なり、創業を要すと、もの學びの師等が千度百度云ひ聞かせ玉へるに、空しく古習に泥み、舊風に溺れて、安んずべきか、深窓に幽居し、暗室に籠りて埋木と朽つべきか、何ぞ夫れ忍びんや、父上は常に三從の道をさへ教へ玉ひける御心なればいかで妾が云ふ事を聞き玉ふべき、憐れ果なき身の上と、思ひ出してせきくる涙、父上は如何に見玉ひけん、何事をか悲しむらん、今云へる事に從はゞ豈喜ばしからずや、はやく應へよと云ひ玉ひき。

やがて涙を抑へて云へり、父上の御心を御痛め奉る事誠に本意なし、親に事ふまつるをよき行爲とは知り侍る、されどこたびの御言葉にのみは從ひ難し、いかなる苦艱も厭ふまじ、此

事のみを免し玉へと乞ひぬ。
父上は忽ち面色を變へ、またしても不埒の事を云ふもの哉、はや廿歳に垂とする、長の月日の養育は誰が爲せしぞ、海山にも比べ難き高大の恩何時報ゆとは思ふ、恩愛を知らねば禽獸とこそ云ふべけれ、よも人にはあるまじ、親の心に背きても尙恩を知るとや思ふ、誤れるの甚しきものなり、是迄從はぬ事幾度なるを知らず、されど、思ふふしありて深くも咎めざりき、今は打捨て置き難し、若尙承諾かずは其故を問はん、とく語りねといと怒りて云はれぬ。
精神確乎として動かず、膽力不拔にして奪ふべからざるものあり、將來女界改革の一勇將たらんものは夫れ汝ならんと、嘗て云はれし身なれども、流石に舊弊古陋に沈溺し、頑どして動かぬ樣を現はし玉ひし父上の恐ろしさに、容易くは得云はず、思ひせまればせまる程、胸いと苦しく亦漸く口を開ひて答へぬ。
妾が少しく物學びの道を知れるとて、斯く云ふにはあらずかし、父上深くな怒らせ玉ひそ、今妾の思ふ所を一通り打明けん、男女室を同ふするは人の大倫なりと、古聖の云へりしは至理の言なり、されば妾いたづらに頑固に流れ、不從に渡らんとは夢さら思はず、いかによき配偶を得て父上や母樣の御心を安めまつらんと日夜心にかくる事絶えず、決して御心を痛めん心にはなし、さのみ云ふも尙御怒りを解くには足らじ、尙一言の云ひ度き事ぞ侍る、免し玉へ。
父上は此時困じ果てたる樣にて首を打垂れ玉へり、耳いと赤く、身躰の少しく震へるは正しく怒らせ玉へるにやありけん、妾また言葉をつぎて云ひけり。
二千年來の風習未だ改新せねば妾の云ふ所をば不義不孝とも聞き玉はん、父上よ男女室を共にするの內若幸福なくば如何にせん、金玉財寶もて幸福を購ふは難し、赤貧洗ふが如き敗室茅屋の裏にも快樂は止ると聞き侍りぬ、父上の御心には從はまく思へども、妾未だ父上の告げ玉ふ人を知らず、若心合はず、其人よからずんば妾の不幸夫れ幾許ぞや、父上誠に妾を愛し玉はゞ願ふらくは妾の心に合へる人に嫁がしめ玉へ、之をのみ只管希ふて止まずと云ひさして、また涙にむせびけり、父上に應へんは必ならずと思ひつゝ斯く云へり。
父上は御怒らせ玉ひて云ひぬ、今の女子憖ひに學問ありとて空しく道理を說き、行ひ難き議論を吐き、以て揚々得たりとなす、片腹いたき事にこそ、此故に疾くより學校にやらじと

云へりしを、御身自らよき人にならんと云ひて强ひて女學校をも卒業しぬ、數年來の父母の望み、斯くて果し得べきとするか、是非に今日は承諾きね、横文字を聊か學び得て、外國の事聞き知れりとて、神洲清潔の民、豈洋夷の蠻風を學びて可ならんや、我國近來保守の氣焰漸く熾なり、蠻族の惡風やがて跡を絕つべし、御身知らずや、我同僚に異教を奉ずるものありとて過る日官職を免ぜられしを、上千司百官より下萬民に至るまで、亦昔の道にふみかへり、神洲の聖風大八洲裏に偏からん、是を知らで、御國の習俗を古し賤しなど、下げしむるは、愚者の云ふ所、識者の恥とする所なり、尙聞き入れずと云ふやと、云ひ終りて妾の顏を見つめ玉へり。

御意誠に理りなりと承りぬ、されど妾の心は尙解けず、國を治めんには先づ家を齊へよと云へる如く、我國の家々よく睦ましからんぞよかるべき、さるに父上が富貴の家をのみ望ませ玉ふは如何ある御心ぞや、妾不肖と云へども聊か學び得たる學業もあり、いかでよき良人を得て之を活用せばやと思ひ侍る、若父上の命じ玉ふまゝに嫁がば或は幸を得ざるのみか、學び得たる所も用ひる所なくして終らん、殘り惜しき事の限りとぞ知る、一年亦來年とはならず、盛年豈再たびかへらんや、今にしてよき人に嫁がずば嗚呼將來の不幸を如何せん、妾の學びし所遂に用ひ得ざるを如何せん、あはれ御心に沿はぬを許し玉へ、妾今賤しき人に嫁ぐとも久しくは斯くてあらじ、やがて良人をして芳名を一世に著はすの大功を建てしめ、父上母樣の御心をもやすめまつらん、こたびの事は是非に許し玉へかしと伏し沈みてぞ乞ひたりき。

父上はやがて坐を立ち、ものをも云はで、去り玉ひぬ。妾暫らく思案にくれてありけるが亦其坐をはなれ平常居なれし一間に歸り、尙物思ひにくれて坐しぬ、下婢それと心得て洋燈を持ち來れば二人の弟亦妾の膝下に來り、姉上何事をか考へ玉ふ、泣くにはあらずや、何事か悲しき事の在はすや、聞かせてたべ杯云ひけるもいと聞き苦しかりき、暫らくは物をも云はで打しほれ居ぬ、弟二人の立去りける後靜かになれば奥の一間に相語らふ聲音の聞えぬ、高きは父上の聲とをぼしく、時々音の絕えにしは母上のもの云ひ玉ひし時なるべし、其夜は何事も聞かで床につきぬ、されど尙思ふ事止まず、父上重ねて云ひ玉はゞ如何に云はん、戀人ありと打明さば何とか云ひ玉ふらん杯思ひ出で、半夜の鐘聲枕にひゞくまで打ねむらざりき。

明くれば父上は例の如く朝まだきより官省に出頭し玉へり、十時とおぼしき頃母上の呼び玉へると下婢のつぐるにより、病床の傍に坐しぬ母上は亦弱りし聲をあげて云ひ玉へる樣昨夜父上は何とか云へるぞ、よき家に嫁がせんと云ひしに非ずや、御身などて承諾かずや、今宵父上歸り玉ふまでに心得させて必らず、承諾かせよと、父上云ひ置き玉へり、若よき理由のあるあらば今云ひ說きね、父上に告げまゐらせん、若よき理由のなからんにはとく御心に從ふを宜しとす、如何に、しか思はずやと、妾此處に於て父上に語りし如く母上にも述べぬ。

されど斯く述べける所にては尙心の打解けぬ樣見へければ、亦言葉をつぎて云ひぬ、父上に語らばやと思ひしが怒らせ玉へる時なれば流石に云ひ兼ねたりき、妾誠を母上に告げて、父上の御心を解き玉はんを希ふ、そは他に非ずと、云ひ始めしが暫しは口ごもりて外には出でざりき、如何に親しき親子の間なりとは云へ、戀人の事に至りてはいと云ひ惡くかりき、されど妾に一點の汚れなく、一劃の恥づべき所なければ、やがて心を勵まして語り出でぬ。

妾に一人の友あり、嘗て親しみ交はる事久し、妾其人をよく知りて敬愛す、素より書生の身あれば富貴なるにあらず、利達を得しにあらず、されど仰ぎ望みて百年偕老を契らん人は他にあらじと思ひ侍る、必らず他日はよき人となりて母上の御心をもやすめ奉つるべし、今暫らく忍び玉へと云ひしまゝ打俯して默々靜々たり。

母上も暫し考へ玉ひし樣にてやがて云ひ玉ひぬ、さのみ思ひし人に嫁がんは望ましき事なる可けれど御身よくも考へよ、昔し故鄕にありける頃妾の家は家老職、彼人の家は足輕ならずや、今こそ容易く交らひもするなれ、世が世ならましかば、同じき心もてゆきかひも許さぬ身なり、されば今尙ほ彼の父母杯は昔の道を忘れず、等しき位置にては交らはず、いかに世のなれる果とは云へ、足輕ふぜいに身を托せんは恥づべきの限りならずや、御身が斯る人にと思ひそめしぞあはれなる、とく思ひをかへて父上に從へと云ひ玉へり。

妾は亦母上につぎて昔の事はいざ知らず、四海一家同胞の如く兄弟の如くあるべき世に尙ありし世の事ども云ひ出でゝ舊習を脫し得ざるは誠に遺憾の極み、いかで此風俗を破らばやと思ふと云ひしかば母上詮すべなくとや思されけん、さらば父上歸り玉ふてしか語らんと云ひ玉へり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

理學

風船の話（其二）

吉田伸子

空中より落下する事

風船にて高く空中に昇りたるのち、風船を棄て、節落傘を用ゐて、地上に下ることあり。節落傘は、直徑一丈五六尺の圓形の絹にて造りたるものにて、開けば大なる蝙蝠傘の如き形となる、只鐵の骨の代りに、糸の骨あり、且つ其骨の末は長く垂て、傘の下にて一所に集りて柄の用をなす樣になり居れり。さて此糸の柄にすがり、又は此處に小さき籠をくゝり付け、之に乘て風船を離るれば、始め數秒の間は、非常の速力にて落下すれども、節落傘は直に滿開し、空氣の抵抗を受け、落下の速力を緩むるが故に、安全に地上に降ることを得るなり。而して鳥度したることなれど、傘の頂上に丸き孔を開き、空氣を漏すこと極めて肝要なり、若し此頂上の孔なきときは、空氣は傘の緣より逃れ、其が爲め、傘全躰を痛く擺動して危險なり。始めて風船に乘り昇騰せし人は、ド、ローザー氏にして、西暦千七百八十三年の十月に之を行へり。此時は風船の遠く飛去らぬやう、長サ百尺許の繩にて、之を地上に繫ぎたりしが、翌年は、此等の繩を用ひずして上騰し、廿五分の間空中に止まれり、然るに同氏は其後の上騰に於て、誤て火を失し、爲に其生命を亡へり。

千七百八十五年、ブランカード及びゼフリーの兩人、イギリス海峽を風船にて渡らんとてドーヴェルより上騰せしが、途中にて風船次第に重くなり下りて、殆ど海中に落なんとせしかば、兩人は驚きて、風船中に積める凡てのものを投棄て、遂に己等の着たる衣服さへも拔ぎ棄て、漸く風船の重サを減じ、辛じて前岸カレーに達せしとあり。有名なる大學者、ゲー、リュサック氏は、千八百四年に風船にて海面より二万三千英尺の高所に達せり、此時氣壓計の水銀柱は十二、六英寸（海面にては廿九英寸餘なるを常とす）に降り、寒暖計は地面にては三十一度なるに、此處にては零下九度半に降れり。しかのみならず、紙の如き濕氣を含めるものは、恰も爐中に入れし如く、乾燥して卷縮し、呼吸は困難を覺え、血液の循環は速になり、ゲーリュサック氏の通常の脈搏は、毎分時に六十六なりしもの、俄に增して百二十に至れり、而して空は殆ど黑く、其シンとして靜なると物すごき斗りなりしと云ふ。かくて、同氏は六時間の後、昇騰の地を距る九十英里の處に降下せり。又近來有名なる風船の

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

旅行は、今より二十年ばかり前に、ワイスと云へるもの、三人の同志と共に、二十時間に千百五十英里を經過せしことなり、此速力は、毎時零ぼ五十八英里にして、今日世界中最も迅速ある滊車の速力に讓らざるなり。

(をはり)

問。諺に月、霜を降らすと云ふは如何　小糸

月夜のみならず晴れたる夜は、凡て寒冷なるを以て、霜生ずるも、曇りたる夜は温暖にして霜を見ると甚だ稀あり。故に古語に所謂「月夜」の中には、亦晴れたる夜をも含有するとならん。

問。晴れたる夜の寒冷あるは如何ある譯

晴空一の雲も遮らざるを以て、晝の間に熱したる空氣及び土地は、容易すく空間に向て其熱を吐き、空氣は愈々冷め、土地は益々寒冷とある。故に晴れたる夜は霜を見ると多し。

問。曇りたる夜の温暖なるは如何なる譯

曇るとは空中に雲ありて蒼空を望む能はざる時のとにて即はち天地の間に隔の壁を生じたるが如し、故に夜に至り空氣及び土地より吐出したる熱、たとひ上に昇騰するも其隔壁に衝突し、反戻して再び地上に降り、以て空氣を冷却せしめず。故に霜を見ると稀なり。彼の果園に於て、寒夜落葉枯草等を燻して空中に烟を滿し、霜の豫防をなすは、則ち此の理に由ものにして、烟を以て隔壁を作るにあるあり。

批評

○福地源一郎氏

所謂る「好人物」(好人物の解本誌第二百卅一號に見ゆ)福地氏の如き人は、俠人の情を受くべき人也。日本評論第十九號に、日本社會生の寄送に係ると稱す「福地源一郎氏」の一篇あり、極めて好く氏が人物を評す。筆力固より植村君の文にあらず、然れども所見悉とく君に似たり。亦以て日本評論全躰の意見となすとを得べし。吾人平素貴族的道德論を忌む、福地氏が末路に對して亦た日本評論と同感あらずんばあらず。たゞ吳々も福地氏が飜然改悔して、眞面目とならんとを祈るのみ也。

○無邊俠禪

妻あらずして書籍を慰さみとし、禪見の開悟を得て手に算盤を彈く所ろの大藏次官渡邊國武氏は、國民之友第百三號に最も有益なる一章を寄せたり。題して「廿三年間財政の結果」と云ふ。蓋し、維新以降廿三年間財政結果の大綱を畧述して帝國議會開會の祝意を表せんとするもの也。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

一に云く、歳入出の結果と、現に歳計剩余七百八十九万八千二百十七圓余あり、國庫に貯ふと云ふ。二に云く、紙幣の結果と、目下流通紙幣三千二百万圓、之に對し準備兌換現在金一千万圓、日本銀行無利息借上金二千二百万圓ありと云ふ。三に云く、國債の結果と、現在二億七千六百三十六万五千七百七十四圓の國債あり、年々歳入中二千万圓を以て國債元利に充つれば、明治五十年に至つて皆濟すと云ふ。四に云く、預金の結果と、現に二千五百六十万圓余の預金ありと云ふ。五に云く、造幣の結果と。六に云く、地租の結果と。七に云く、關稅の結果と。八に云く、官有財産の結果と、鐵道電信等の固定資本官に屬するもの四千七十五万圓余と。九に云く、準備金の結果と。十に云く、中央備荒儲蓄金の結果と、現に四百九万余圓國庫に保管すと。
何れも重千鈞の報告にして、甚はだ有益、甚はだ有益。

○國會の前途

時事翁此頃の説法、別に新らしきとありと云ふにあらねど、若し之を英文に反譯するものあらんには、極めて妙なるべし。翁が所望も亦然るに似たり。特に外國人の注意を促がす。

○倫古龍

松村介石氏著

曩に青年立志之礎を著わし、万丈の光焔を日本青年が爲に吐發したる松村君は、今亦米洲の聖傑アブラハム、林コルン、の傳を物す。葉數僅に二百頁に足ねど、林氏が、何を以て能く豪傑とあり、亦何を以て能く豪傑の事を爲し得たるかの由緣を妙叙し、史記戰國策中の人物を理想とする日本青年に、一大叱鞭を下す。蓋し松村君は、青年の眞の友なり。常に謂へらく、青年は龍の如し何如に變化するやを知る可らずと。此を以て、之を重んずると極めて重く、之が爲に痛心するは亦甚はだ切なり。もし此一書を精讀せんには誰か林氏が高潔偉大なる風采を想望し、肉動き靈激して「吾亦人也」と憤勵せざるものあらん、而して之と同時に誰か亦著者が至誠至强なる筆力に動かされて泣かざるものあらん。吾人が此類の小冊子を得る喜は、千万ページの百科全書的製造書籍を得るの比ひにはあらず。

○母のつとめ

三島通良氏著

本書の價値多きとは第一版の時に既に言ひぬ。然るを今亦た大に增補訂正し、一層の價値を加へぬ。カナ遣ひに至る迄て用心深し、他は推て知るべし。吾人は彌よ此書を推賞す。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

兒籃

人の花は赤い

ふみ子

アラお母さん、私しにも兄さんの、樣な、善い玩具を下さいな……「ウソッ私しのは兄さんのよりも、余程いけないんですもの、イヤヨお母さんは、いつも兄さんにばかり善いものをあげるからヨー、ヨーッテバ兄さん、私しに夫れを下さいな、私は其れが好きなんだから、ヨー同じ事でも宜しいから其方を下さいな、下さいッてば下さいな」バタ〳〵〳〵ワアイ〳〵と、泣出すは、子供の常ですが、是は誠にいけないとで……扨夫れならば、其ものと、取替へてあげたならば、夫れで滿足なさるかといふに、決してそうは參り升まい、人の手に持て居る間が好きなので、自分に與へられると、直にいやになるんです、私しは決してあなたがたに惡まれ口をきいて、意地めるのではあり升ぬが、こういふ癖は子供の内に直して置かぬと、大きくなつてから、何事にでも飽きッぽい人間となつて、何事をしても直に倦み、徒に他人の出世を羨みて、一生涯うろたへまわり、何事も仕遂げるとの出來ぬ、仕方のない人間になり升るから、皆さんは子供の内にそんな惡い癖を直しておいて、忍耐強き、立派な人になる樣にせねばなり升ぬ。

此事に就て一ッのお話がムり升、或る處に漁夫と獵人とあり升たが、此人々は、いつも同じ方角に行て漁をしたり、獵をしたりして居升たから、獵人は、漁夫の獲もの、多きを見、漁夫は又獵人が、いつも兎や鹿などを、繩に釣して提げて歸へるを詠め、羨しさに堪へず、どうかして一切でも肉の御馳走に預りたいと思ふと、獵人の方でも又、獸や鳥の肉は、最早食べ飽きたから、一寸あつさりと肴を喰べて見たいものだとおもッて毎日〳〵逢ふ度ごとに兩方から、其得ものをながめて居升た、其内にとう〳〵心安くなッて相談が極り、毎日魚と獸の肉とを、少し宛取かへて食べるとと致し升たが、さて珍らしい間は、誠に甘味くて、一生取換て食べたいと思ひ升た位でしたが、段々に其味が口になづんで來て、終には又自分のものが喰べたくなり、言合した樣に、いつの間にやら其約束を取消して、とう〳〵換へるとをしないやうになり升たといふ事です。ダカラ皆さんだつても、無暗に人のものをほしがらずに自分には先づ自分に與へられたものを大事にして、失はぬ樣にするのが緊要でムり升。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

文學

池袋清風大人批（東京案山子の屋社中）

秋夕　　江間くめ子

、、淋しくもくる丶山家の夕まぐれ塒に歸る鳥が音ぞする
（靜なる秋の　邊　からす　聲ぞ聞ゆる）

同　　尾崎宮一郎

、、水にうつる雲の姿もしづみゆく野澤淋しきあきの夕ぐれ
（底の　影くらくなりにけり我山の）

評秋夕に淋しの詞を用ゆるならば餘程上手にいはなくては　　みさを

同　　同

、、汐風に打たる丶雁の聲す也あかしの海の秋の夕くれ
（由良のみなとの秋の夕くれ）

評打たる丶といふならあし原ともいはなくては直して海邊雁とすべし再考之を極適當の名所を持出せば打たる丶と云ふ詞中々力あり歌は妙なもの也

同　　同

、、秋寒み夕日きえ行く柴の庵にみ山鳥のこえぞ聞ゆる

海邊の夜景　　同

、、明石かた波路はる〲見え初めて殘れる月にかへる舟かな
（松浦　明け　なきわたる）

評斧正にて海上雁とすべし

雁　　尾崎宮一郎

、、秋風は空もふくらし雲井より落來る雁のこえ寒けなる
（ぞ身にしむ）

後醍醐天皇笠置山を落ち給ふ（太平記）

辱くも十善の天子玉躰を田夫野人に替へさせ玉ひて、どことも知らず迷ひ出させ玉ひける御有様こそ淺ましけれ。如何にもして夜の中に赤坂城へと御心計りを盡されけれども假にもいまだ習はせ玉はぬ御步行なれば夢路をたどる御心地して一足には息み二足には立留り晝は道の傍なる靑塚の陰に御身を隱させ玉ひて寒草の疎なるを御座の茵とし夜は人も通はぬ野草の露分け迷はせ玉ひて羅縠の御袖を乾かへず兎角して夜晝三日に山城多賀の郡なる有王山の麓まで落させ玉ひてけり藤房季房も三日まで口中の食を斷けれは足たゆみ身疲れて今は如何ある目に遇ふとも逃ぬべき心地もせざりけれは詮方なくて幽谷の岩を枕にて君臣兄弟諸共に現の夢に臥玉ふ。梢を拂ふ松風を雨の降るかと聞召て木陰に立寄らせ玉ひたれば下露のはら〲と御袖に懸りけるを主上御覽ぜられて、

　さして行く笠置の山を出しより天が下には隱れ家もなし

藤房卿淚を押へて、

　いかにせむ憑む陰とて立よればなほ袖ぬらす松の下つゆ

○和歌を作る事（其二）

かほる

和歌を作らんとするもの最初に如何して作るべきや、其方法を知らずといふにあり、此點につきて人々異見を抱くを見る、或人は最初に雅言を學び、之を一通り記臆して後和歌を作るを可とす、そは和歌は必ず、雅言古語を用ひて作るべきものなればなりと、又曰く古來有名の歌書を讀了するを要す、そは則る所なくして和歌を作り得る害なければ也と、余の見る所を以てすれば兩者未だ後進者を導くの道にあらずと思ふ。

勿論和歌は風雅の意を現はすべきものにしあれば、其が內に用ゐる言語は自ら散文俗語と異るべきは自然の事なり、されど和歌を作る事もと熟達習練を要す、古來我國にあらゆる雅言古語を悉く暗記すればとて必らずしも歌を詠み得るにあらず若夫れ習熟の功成らば古語を知らざるも巧みに詠み得べし、されば先づ和歌を作るの術に達するを要す、徒らに言語を學ぶを以て光陰を消するは拙策の極のみ和歌を作らんとすれば自ら歌書を繙くの必要あらん、此時に於て要する所の言語は自ら記臆するを得べし、殊に言語を學ばんとするに及ばず、是余が第一の說を不可とする所以なり。

若夫れ能ふ可くんば天下萬民詩歌を作り且解するに至るは誠に望ましき事なり、されど豈望むべくして行ふべからざる所のみ、人智淺薄、一事に通じ、一業に達するすら容易の事にあらず、況んや他の事業に加へて詩歌を學ぶに於てをや、熟達し難きは理の睹易きものゝみ、此處に於て分業の法、萬事に行はる、たゞ之れ此法あり故に、和歌に至りても之を專務とし、終世此處に心を用ゆるものあり、和學者と云ひ、歌仙といふもの即ち是なり、されば各人皆和學者となり歌仙となるの必要なし、只自ら感想する所を述べて人に知得せしめ亦他の詠出せるものを解得するまでに至らば即ち可なり、秀詠傑作を出さんは之を歌仙に委して可なり、之に由て見れば和歌を學ぶもの必らずしも歌仙ならず、己が感想を述ぶ事と、他人の詠歌を解するを以て目的となすに過ぎず、斯る人をして古來の歌書を通讀せよと求むるが如きは豈無理ならずや、文法に於ては何々を讀め、歌書に於ては萬葉を始め、八代集、能ふべくんば廿一代集をも通讀して模範とせよといふが如きは嗚呼歌仙ならずして爲し得べき所ならんや、余は信ず必らず他に簡易の詠歌法あるありと、若古來の歌書を讀まずして詠歌する能はずと云はゞ歌道を專務とする人の外遂に學び得るの道あるまじこれ余が第二の說を不可とする所以なり。

（つゞく）

笑ひ草

○理外の理

さよ子

世には隨分、理外の理といふものありて、普通の道理もて推し測られぬとも、或る一の道理に照らしては、實にもと感ぜらるゝとなきにしもあらず、大古諾冊の二尊が天の奴鉾もて、溟涬を探り玉ひつる其滴凝て大八洲の國となりしてふことの實否は儂は知らず、去れども或る意味を以て之れを解釋すれば、かゝる事全くなしともいひえらるまじ。又田原藤太秀郷が、龍宮の乙姫より、賴みを受けて、三上山の百足を討じたる事も、平治のむかし威權肩を比ぶるものもなかりし、平相國入道が、扇もて既に沒りにし日を呼戻したりといふ談話も、是を文字通りに說けば、誠によりどころなき、はなしの樣なれども、之れを深き寓意あるもの語りとして聞く時は、一々其實事に、あてはまりたる事のみにて、すべての事を有りの儘に說きつるよりは、却てなかく\に趣味深き心地せらるゝものあり。其他世に幽靈てふものありといひ、なしといふなどの議論も二派に分るゝものから、なしといふ方多く

人に信ぜらるれど、さて強ちに、なしとも定め得られぬ場合もあるやに思はる、左れば世の中には、理外の理てふとはあるものとして、いぶかしげなるはなしも、一概に馬鹿々してふ詞の下に、無殘にも葬り去るまじきものぞかし。

僂の知れる或る田舍人、夫婦共稼ぎして睦しく暮しけるが、一日の事になむ、夫は何れへか出行きて、日暮るゝほどに、歸り來るべき筈なりしも、思の外用事早く片付たればとて、晝過るほどに歸り來つ、腹も痛くすきたればとて、妻に食を求めけるに、妻は今朝しも御身は夕方にこそ歸らめと、いひ玉ひつるをもて、妾は冷飯にて晝餉濟せつ、夕方こそはおん身の爲に溫き飯をも炊ぎ、汁をも添へて進めばやと其心して待ち居しかど時早ければ未だ爨ず、これ見そなはせ生憎に、櫃さへ底を拂ひしものをとて、今しも洗ひたるまゝ雫滴る計なる飯櫃の、裏口に掲げたるをさし示しぬ。夫も不意の歸宅、さもこそとは思ひながら、流石に何かものせではと、我ものながら床しげに、網戸棚などとみこう見つるに、乾からびたる梅干と、香のものゝ外何ものも見當らず、只たきたての糊のつややかなるを、幾塊か皿にもりたるを見出しぬ。これなりとものせばやといひ出しに、妻はそはあまりにとはおもひしかども、左はとて外にものもなければ、余儀なく同意して砂糖をさへに添て與へぬ。かくて夫は糊を嘗め終りつまだ日暮るゝには程もあらめ、いで一仕事なしてむと、鍬かたげつゝ田圃へ行き、仕事にとりかゝりけるが、日にあたるに隨ひて、手先頬の邊など、次第にこはばり來つ、終には身動きも出來ぬ樣になりぬ。さていかにしつる事かとて、助けを乞んとするにも、舌動かず、余儀なく田圃に突立居けるに、折能く馴染の農夫來かゝり、此躰を見て大に驚き、急ぎ妻にかくと知らせける、妻はあはてふためき、驅付け見れば、聞しに違はず、夫は睫もせで突立ち、眼の邊は、濃き涙に沾されて、睫毛は幾筋も固まり付きつ、さながらつらゝの下りたるに彷彿たり、あな淺間しの我夫やと聲を限りに泣き叫びつ、いかで醫師を呼び玉はずやといひ罵る、實にもと彼農夫は、急き醫師を招き來たり、言葉せはしく子細を告げ、其の治療を乞ひけるに、醫師は篤と聞終りて眉を顰め、是は通常の藥にては治るまじとて、しばし首傾けてありけるが、やがて一服の藥をもりて與へぬ。漸くにして手に〳〵脣を開かせ、頬を引張などして、之れを飲ませけるに、病人は忽ちにしてもとの

ごとく、柔かなる身とはなりぬ、餘りに効能の著しきに、人々は皆呆れに呆れ、全じ村に住みながら、今の今迄此先生を左まで上手なる國手とも思ざりき、扨只今の藥は何と名る藥にや後學の爲め聞まほしと、問けるに、彼醫師はしたり貌にて、

「ナニ今のは横槌の細末に一匁の冷水を吹掛けて貯へて置たものです、

と、事もなげに告げ知らせけるとなむ。

隨感

誰が栽し菊

中島俊子

余が借り來りし家は人に貸す爲に作りしものに非ずして或金滿家が長く住せんとて作りしものなりと聞くだけありて構造甚下品ならず夜鎖り行屆きて梁上の君子も容易に侵すべくもあらざれど無情の降雨時々頭の上にポッンと極く無遠慮なり。たとひ吾々のこれに堪ゆるあるも此儘に打過ぎなばこの立派の建築も直ちに價を落すならんと思ひて再三使を派し漸く大工を來らしむ。のこぎりの響きかなづちの聲斷續たるも姑息治療に過ぎざれば家の持主に對しては不親切千萬の如く覺へたり。一日余が例として午食後庭園を散歩せり。庭園狹からず。薔薇山茶菊花を以て充つ其他草花枚擧に遑あらざれど今は都て零落に歸す。此零落の傍ら尤も麗しく開きしは黄菊なりこの花の開くは何人が栽しものなるか必ず少なからざるの手入を爲せしものに相違なかるべし。これが手入をして見よとて栽しものは見る能はずして風來の余が占領するは先人は素より菊花も本意なき事ならんと思ふては、世の中の事もこれに類する事少なからずとて、轉た感に堪えざれば一詩を賦す、

移住都城未一旬　家門風物主猶賓　東籬黄菊間應悔
對此新來不識人

婦人傍聽

三美鄕女史

衆議院規則が婦人傍聽の禁を解きしより婦人にして傍聽に出掛けしもの五六名ありと聞く婦人が傍聽に出掛るや否新聞紙は之を記するに何より先其容顏の事を筆し或はこれが形容を狆が四五反嚏したる顏なりなど說く妹は其評語の適するや如何は論ずるまでもなく新聞上に此の如き事を記するの必要なきを信るのみならず新聞が此の如きを記するは新聞が德質を

欠くの一點として甚だ新聞の爲に惜しむものなり新聞紙が婦人の傍聽を聞くべからずとして故らに筆に記するものなれば親切に其由を記するの上品なるに若かざるなり新聞紙は婦人の事に限らず巧みに世人を品評するの伎倆は新聞の特有に歸するもの﹅如く新聞を讀む毎に覺へず失笑する事屢々ありこの失笑は即はち嘆息を來たすの原因たらざるなし新聞紙あるものが人の揚足を取るを是れ事とし人の失策を見出すをこれ勉め人の秘事を發くをこれ効とし人を離間するをこれ策と爲し殊に國會議院中の笑柄を輯錄するを面白き仕事を爲す等にいたつては新聞紙は果して立憲政治の國を保護するの目的なるか將打破するの目的あるかを疑はしむるものなきを得んや

問答

可愛子

問。子供に牛の乳を飮ませ候に好みて飮まぬ時の候何如が致しませうかよき工夫はなきものに候や(一人の母)。

答。何ぞ乳に故障あるか又は赤さまの心持が宜しからぬ故でありませう兎角早々醫者に見せるがよろしう御座います左る譯もなく好み玉はぬ時は少し斗り鹽を混ぜて御覽なさい大方は好く樣になりませう。

問。私は昨年洗禮を受けて基督教の信者となりましたが、何故か窮屈で、惱みが多くて困ります、外のよい信者の方を見ると、いつも樂しさうな顏をして居る、私はそれを見ますと羨ましくてなりません、どうしたら心が剛く、清らかに樂しくなることが出來ませうか、お敎へ下さらば幸に存じます(一女生)

答。大層六ケ敷い御質問です、信仰は人々によつて異なるものですが、私の經驗したところでお答へ申上げます、聖書の中に「窄き門より入れよ」とありますが窄き門から入ッたなら必ず窮屈な道理です、信仰の道行には屹度窮屈な思ひや、悲しい思ひをする時があると存じます、けれど是は神が私共を眞正なる自由の境に導き、清らかなる快樂の地に招き給ふ驗であります、故に喜んで此境遇を通り拔け進まなければなりません、若し此時に窮屈だ、惱が多いと云て後を顧みて退いたならば、墮落して今の社會一流の汚れた人間となつて仕舞いませう、世間の腐敗した信者とか、墮落した信者とか云ふのは、多く困難の際、窮屈の折に退歩して社會的に流れた人かと思ひます、故に何でも後を顧みるとなく、勇で前に進むが第一です、そうしたならば、眞の自由と眞の快樂を得るとであらうと、私は堅く信じます。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

寄書

○近江の長濱にて内田くんの新婚のむしろに侍りて　郁山人

萬代を　君にさゝする　秋の田の　黄金の波の
さやかなる　音をしきけば　中〳〵に　年の收めも
豐かにて　民のかまどに　打ちなびく　煙の末も
のどかなる　小春も空に　立田姫　手織の錦
みによそひ　帶の白雲　腰にしめ　頭に千代の
みどり松　みくしさゝして　結びつゝ　もすそを洗ふ
立田川　千草の花は　綾どりて　組の流れの
音淸き　秋の景色と　なりにけり。　まして今年は
三千とせの　永き眠りの　ゆめさめて　豐葦原に
吹き來る　自由の風に　ひら〳〵と　一天世界を
照すなる　國の御旗の　朝日かげ　富士の高根に
打ちなびき　古今東西　例なき　君が稜威は
足曳の　龜の尾山の　末長く　國の基は
岩が根の　動かぬ上に　立にけり。　あゝ此年よ
此月よ　選て結ふ　妹と背が　契りはふかし
琵琶の湖　世の仇波は　をさまりて　渚につどふ
うろくづは　躍りて君をや　祝ふらん。　望みは高し
伊吹山　浮世はなれし　頂の　松の梢の
友つるは　翼ゆたかに　天雲の　遙あふたに
まひたちて　君が千歳や　歌ふ成らむ。

あしたつの翼ならべて君が代の長濱の浦になき渡るみゆ
千代の上に千代をかされむ雛つるのなく音またるゝ今日の嬉しさ

時事

○侮を招くこと勿れ

諸大臣が決心のほど床しとこそ存ずれ。三百の議員諸公謹しみて他の侮を招くこと勿れ。

○大學及中學

帝國大學は學理研究にてあるべし、然れども學理研究は日本語のみにて出來るものにあらず、若し吾人が理想を言わしめば、大學は最高等の學問所にし帝室に屬せしめて、僅々數十人の學生を養成すれば足れり、他は全廢すべし。高等中學の無用なると言ふ迄もなし、たとひ有用なりとするも、民間にて十分に出來べし。

○防ぐか、攻るか

たれか攻る爲めに軍備を爲すと言ひ得るものあらんや、况んや、一國の大臣に於てをや。

○高梨哲四郎氏

遊廓より存娼運動の爲めに金一千圓を貰うけたりと言ふ。而して氏は議場の壇上に毎度慷慨演說を爲す。

○議會の春近し

果して豫言せる如く追々靜かになりぬ、日本の議會に本來治めがたきほどの困難あるべしとは思へず、たゞ黄白病、貴族病、痿縮病などの傳染せぬやうにせば足れり。

○教會と女子

ルーテルの言へる如く、教會は殆んど女性の信仰にて生くるものなり。靈の事を考ふべき教會に於ては、男女など云へる肉性を念頭に置かざらんとぞ願はしけれ、左れば命ぜられて働らきのあらんほどの者は、長老にても執事にても傳道師にても、何役にても謹んで之を擔當すべし。

○一致教會

其大會に於て、長老及び執事に婦人を用ふべきや否やの論議あるとき、執事には、用ふべしと可決したるが、長老に於ては否決となりぬ、其多少の點數左の如し、

可用　三十一點 日本人三十人 西洋人一人　不可　三十八點 日本人三十人 西洋人八人

左れば、日本人の考にては同數なりき、但だ西洋宣教師の加はるによつて如此し。メソデスト派に於ては、女宣教師を用ひ之をして大會に臨ましめんとの議論日に益し隆盛ならんとするに、一致教會が例の如く頑々保守的なるは歎くべき也。

○女幹事

幹事には女性こそ好けれ。長谷川泰氏の令夫人は、夙に莊子荀子を愛讀し、賢名淺からざる人なるが、濟生學舍の監理は一切之を擔當し、たゞ表向に十二三圓の幹事を置きて外向に奔走せしめ、實務は悉く夫人自ら處理せらると云ふ。幹事には女性こそ好けれ。前號の女執事の一項を參看すべし。

○廢娼の聲四方に反響す（其二）

岡山縣會に於ても、亦山形縣會に於ても將に其議あらんとし、熊本縣會に於ては去十五日に其建議案出て、愛知縣會に於ては去十六日に出で、又た愛媛縣會に於ては、去十三日淺井議員の發議により廢娼建議を出せしに、滿塲大多數の賛成にて向ふ五ヶ年限り公娼全廢するとに可決したり。

參考　可決（神奈川縣。愛媛縣。京都遊廓移轉）。
討議中（山梨縣。愛知縣。熊本縣。大坂府。兵庫縣。）。
否決（東京府三名不足。長野縣二名不足。）。
運動中（義人のある處ろ、各地）。

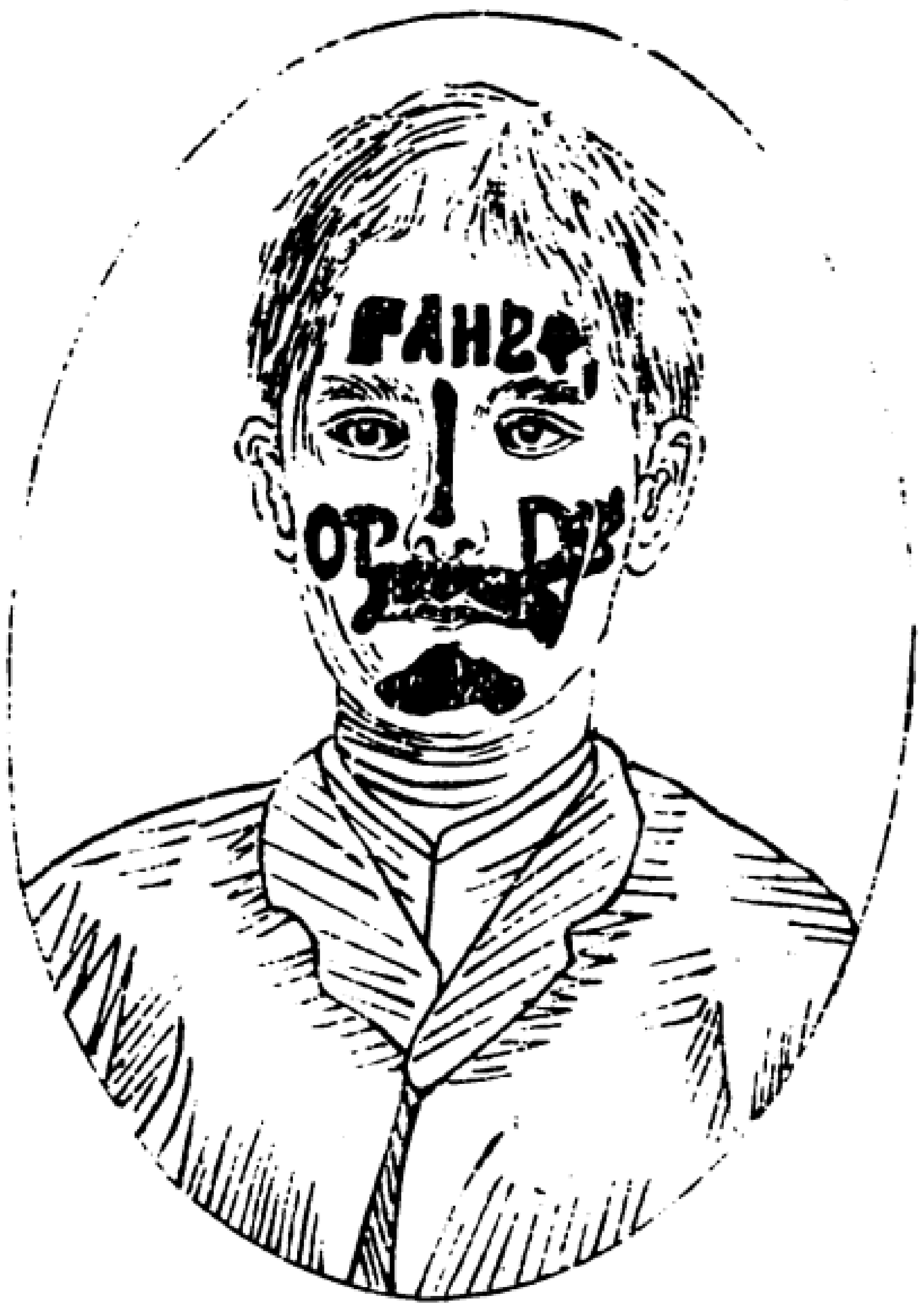
○自由黨内の廢娼論

板垣君、星君の事は既に言ひぬ。大井憲太郎君、片岡健吉君、林有道君、杉田定一君、山田武甫君の如きは、勿論皆な公

唱全廢の意見を有し、大井氏の如きは喜んで國會請願書に調印あらんとす。

○魯士亞人

ユダヤ人は憫れむべき哉、到る處ろに迫害をうく。此頃ろ魯士亞に於て崇むる所ろは近古非常にして、或る一男兒は、林檎一つを取りたりとて直に裁判所に引出され、「ユダヤ人」「ぬす人」と、下の圖の如く入れ墨せられぬ。悲しき哉。



○金玉均氏の著述

朝鮮の逐客金玉均氏、即ち岩田周作氏は、近頃何か感激する所ありて、既往數年の間、自が國事の爲めに盡せし履歷、及び彼の朝鮮事件の顛末を筆し、世に公にせんと、目下起草中なりと聞く。吾人は其末路に同感を表し、常ならぬ心地して其の速に出ん日を待つ。

○東京の飲水

中濱東一郎氏が東京の上水を分析して、其水の性を吟味ありたるに結局左の如くなりしよし、

場所	固形物總量	格魯兒	硯色の量	バクテリアの量
關口	一〇四、四四	一四、六七	二、〇八	九五五七
水道口	一〇七、八五	一五、二〇	二、二五	一一一〇〇
本町岸	一〇九、二五	一六、六三	二、四七	三三七〇七
緑橋	一一〇、五七	二〇、二〇	二、五九	一四〇三五
米澤町	一〇〇、八五	二三、四九	二、八三	八四二五
本材木町	一二五、五四	二九、三八	三、一四	八五九二
大木戸	一九六、〇〇	一〇、四二	二、二五	六五三五
麹町十三丁目	一六二、八五	一一、九六	二、三四	八五五五
金杉	一〇二、二〇	一一、七五	三、〇〇	一四〇〇〇
新船橋	九一、一四	一七、八八	一、五五	一〇六五〇
靖國神社內	一二四、一七	一一、七七	二、二七	六三〇〇

○女學雜誌改進

東京メール新聞は、之に付き精はしく評したり、轉載して表紙裏第一面に掲ぐ。

○社員の傳

速記彙報第二十五號には、本社の速記員安藤たね子が略傳を載せぬ。

雜誌

可愛子

●時事新報　の國會の前途は滔々數萬言述べ來りて十六日に至る平易の文字を使用して迫らず激せず例を引き證を擧げて世人が多く氣附かざる德川政府の長所を說き而して地方自治は日本固有の制度なる事を明らかにし更に論歩を進めて曰く今日新制度の圓滑に行はれて正に立憲の新政躰に適するは古來民心に染込みたる自治の習慣こそ有力なる素因なれ人間世界無より有を創造する能はず唯僅かに形を變ずべきのみなれば今の當局者も地方自治制の發明者創造者を以て自ら居るとなく新舊取捨の際に小心翼々護愼に護愼を加へんと我輩の祈る所ありと勸告し來だ局を結ばず。

●日本　は十三日の紙上に於て咳々生の政黨論を掲げたり、雄健の筆穿々時弊に中る、曰く政黨は主義を同じうし方向を共にするものゝ相合して强大なる輿論を作り一世を唱道するものなれば、眞に報國の志を抱きて國利民福を以て目的とし苟且も私利の念を挾まざるときは其目的を遂する一の方便なりと雖も、一たび大觀を失するときは至大の弊害を生じて國家を蠧害することあるを知らざるべからざるなり、大觀あるものは君子の黨にして大觀なきものは小人の黨なり、殊に政黨利害の直接に發顯するは國會議院なりとすと、それより進んで士の道に志すものは世論の爲めに動かされず、流俗の爲めに變ぜず堅く其信ずる所を執り死に至て變ぜざるを要す、彼の輿論の爲めに制せられ、多數の爲めに厭せられ、或は一二領袖人のために左右せられ、吾が信ずる所を棄てゝ、吾が非とする所に從ひ、口は心に違ふの辭を吐き、手は意に反くの文を草するに至ては、自ら欺き人を欺き、天下後世を欺くものにして、獨り國家の罪人たるのみならず、總裁の罪人と云はざるを得ざるなりと、三百の議員に向て注意を喚起し、歷史家をして初期の議會は大觀なしとの評辭を下さしむる勿れと叫破したり、論稍や僻すと雖も、參考として讀むの價値は十分あるべし。

●國會　は黃色人種の代議政躰と題し、十六日の紙上に於て、彼の輕慓、滑稽、喧噪、怒罵の國會が、沈靜廟整に歸せしば、反動の致す所に過ぎざらん、然らば反動の更に再反動を激成し、喧々囂々復た前日の失儀不躰裁を演ずるなからんや、吾輩が議員諸氏の猛省反慮を望むものは正に此に在りとすと、それより彼の白人が我國會に注目留意するの深きを說き、且つ人民が國會に對するの情を述べ、更に筆を進めて曰く嗚呼彼の外人の輕侮、加ふるに內人の不信用を以てせば是れ豈に來議院の面目を汚すと大なるものにあらずや、議員諸氏の反省熟慮せざるべからざる所此に存す、諸氏能く日本國民の躰面を表示し、其代議制に適せることを證明し、外人をして念を東洋問題に斷たしめんか、抑々亦黃人の代議政躰をして一時浮泡の幻影として、好笑の種たらしめんか、諸氏の覺悟、諸氏の希望果して如何と、力を極めて諭告せり。

通信

山梨縣通信

山梨通信員

●都留郡に於ける婦女の基督教信者　南部留郡桂村に於て川合きくの小山くの岩田とめ三氏は去る十一月二十日基督教の洗禮を受けたり南北都留郡に於て婦女にして基督信者となりたる者は三氏が初めてなり

●廢娼運動　は目下ますく盛なり輿論奮起し妓樓の主人は狼狽す存娼義會とい へるもの反對に起れども妓樓の不景氣は日々に甚し。

岡山縣通信

岡山通信員

●岡山縣の廢娼運動　同縣下に於ては去る八日有志者の連署を以て廢娼建議書を縣會に差出したり又有志女子總代として中村靜子（竹越與三郎氏の細君竹村女史の母）よりも縣會議長へ宛て廢娼建議を出したり縣會議員中にも廢娼論者少なからす本年の縣會は頗る多望なり。同縣下の貸坐敷娼妓免許地は十五ヶ所にして娼妓の全數は四百九十七人なりと理事者は議會に於て語りたり。目下廢娼論の盛なる爲めに妓樓の配慮一と方ならず。

大阪通信

通信員　油谷治郎

●婦人教育會　十二月九日浪華教會堂に於て婦人教育會の開會式を行ふ本會は主として學校及び家庭の教育を隆盛且つ完美ならしむるの目的を以て立ち先づ第一着の運動として梅花女學校其他の女學校の生徒にして學資金の足らざるを補助せんとす每月三錢以上會費を出すものは會員たることを得べし目下會員募集中なり。

女報

●女王御入輿　京都御在住の久邇宮の御末女阿喜子親王には豫て華族侯爵池田家より御婚儀の奉請ありて此程目出度御契約調ひ御結納の御儀式も濟み今月十四日京都御出發東京なる伏見宮の御邸に着來る廿五日改めて池田家に御入輿あらせらるゝことに御治定ありしと云ふ。

●新嶋先生未亡人　故新嶋先生未亡人八重子氏は此程出京麻布なる栗津氏方に滯

在せられ去る十七日佐々木豐壽氏と共に國會の傍聽に赴かれたりと。

●櫻井ちか子　櫻井女學校の創立者なる櫻井ちか子氏は今度越前敦賀へ向け傳道に赴かれたりと。

●高知貴婦人親睦會　高知縣出身の貴婦人達は去る十五日富士見町富士見倶樂部に於て親睦會を開きたり。

●國會に於ける西洋婦人の傍聽　去る十五日初めて國會傍聽席に二個の西洋婦人を見る是れミス、ゲロー姉妹にして紹介者は中島議長なりと。

●末松夫人の國會傍聽　末松謙澄氏の夫人生子は去る十五日國會傍聽席にありたり。

●女子手藝學校　町田やす氏の發起にて昨年十月開校せる、芝公園能樂堂前なる女子手藝學校は、此頃全く落成したり、落成と同時に内部の組織をも改良する由校長は是迄の如く故松田府知事の未亡人なりといふ。

●遊客閉店の建議　十二月十六日京都府市部會より府知事へ遊客市街を閉店せしむることを建議せり。

●大擧して密賣淫女を捕ふ　去る十日の夜巡査五十餘名にて本所緑町津輕の原に多くの密賣淫女を拘引したり。

●獨逸、白耳義間の賣淫女保護規則　其規則の大略は此兩國に契約を結び一契約國の婦女が他の契約國に於て醜恥の業を營むものあらば其情狀を調査して之を本國に通知し若し自己の意に反して賣淫業を營むものあらば其請求により之を本國の國境まで護送するの義務を負ふ云々なりと。

●萬國產婆大集會　本年九月二十二日及び二十三日獨國伯林に於て初めて產婆の大集會を催うし獨墺兩國の各產婆會より委員を派出したり總数無慮九百人極めて盛會なりしといふ。

週報

●官令　九日勅令を以て外交官、領事官及書記生の定員を裁可せらる。

●宮庭　十三日皇太后陛下芝公園内能樂堂へ行啓あらせらる●同日皇太子殿下は近衛步兵第三及第四聯隊へ行啓あらせられ十五日には南豐嶋郡第一御料地御獵場へ行啓あらせらる。

●政治　九日立憲自由黨常設委員板垣伯大井憲太郎星亨外二名の諸氏同黨倶樂部に會す●十四日海軍大臣の案内によりて衆議院議員軍艦を觀る●十五日大山陸軍大臣樺山海軍大臣芳川文部大臣衆議院にて演說す。

●經濟　十六日東京橫濱間の電話交換始まる。

品名	十二月十七日
白米（一円ニ付）一等米	一、〇二（斗升合）
二等米	一、〇四
三等米	一、〇八
四等米	一、一六
五等米	一、二一
正米（一円ニ付）肥前米	一、五一（斗升合）
越後米	一、五四
尾張米	一、五一
美濃米	一、四九
忍領米	一、四六
雜穀（一円ニ付）本貫大麥	二、五五（斗升合）
上州小麥	一、六八
梅澤大豆	二、二〇
青柳大豆	二、一〇
吟小豆	一、五五
白胡麻	一、二三
黒胡麻	一、五五
搗（一円ニ付）赤穂	三、〇七
大搗	三、一〇
本齋	四、八五
醬油（一円ニ付）最上	七九
極上	九三
上物	一、三五
中物	二、一〇
下物	二、六〇
乾海苔（百枚ニ付）洲崎極上	九〇〇
大森同	八五〇
深川同	九〇〇
潮田同	六五〇
上總同	五〇〇
炭（一円ニ付）伊豆上	四五〇
同中	四八〇
同下	五五〇
下總土釜	七〇〇
同次物	九〇〇
生金巾（百反ニ付）三巾イ象	二五八、〇〇円
同大鳥	二四二、〇〇
並巾赤鳳凰	二〇四、〇〇
天竺青鳳凰	一四〇、〇〇
キヤラコ	三七〇、〇〇
鰹節（十貫目ニ付）薩摩大	一五、五〇円
同小	一三、五〇
土佐大	一〇、〇〇
同小	七、八〇
伊豆大	一八、〇〇
同次	一五、〇〇
木綿織物（一反ニ付）佐織紺織別上	六三〇
納戸縞別上	四八〇
同茶縞別上	五〇〇
同布團縞別上	四八〇
生機縞上	三一〇
同布團縞上	二九〇
美濃黄八丹上	二九〇
大和黄八丈	二五〇
とび八丈縞	二二五
美濃双子	五〇〇
糸入愛國縞上	九八〇
笠井糸入縞上	一〇五〇
養老絞上	三一〇
京薄花色上	二六〇
和糸紅花染上	二六〇
大丸唐紅花上	二二五
眞綿（一貫ニ付）飛無銘	一一〇、〇〇円
並無銘	一〇五、〇〇
上入金	一一五、〇〇
並入金	一一〇、〇〇
花色絹　糸好生（一百目ニ付）	五、三五円
小節生（八十目ニ付）	三、三〇
秩父生（二百目ニ付）	五、〇〇
毛糸（一百斤ニ付）鶴判上	一〇五、〇〇円
同染分	一〇〇、〇〇
同中細	一一五、〇〇
同極細	一一七、〇〇
靴下用極上	一二〇、〇〇
綛（一円ニ付）新丹上銘大入	七九〇（貫百十目）
同京丹大入	八〇〇
同坂丹大入	八一〇
地綿文庫入	九〇〇
同泰生	二、一五〇
石油（一箱ニ付）チヤスタ	一、七六円
ホーキ	一、七四
デボース	一、七二
ロシヤ	一、六八
水油（一樽ニ付）地水	八、二〇円
胡麻	九、二〇
荏油	一〇、三〇
桐油	六、九〇
製茶（一貫目ニ付）山城江州大頭	一、九〇円
同小頭	一、六〇
狹山大頭	一、七五
極上骨屑	七八

東京廢娼運動義捐金の廣告

八圓	東京婦人矯風會
五十錢	無名氏
五十錢	東京有隣堂 穴山とみ
二十錢	志津順哉
十錢	山口てる
十錢	山口忠三郎
五十錢	東京矯風會
小計	九圓九十錢
前號合計	十二圓
總計	廿一圓九十錢

同出費

六十二錢五厘	(十一月十三日)	議員招待郵稅及箋紙
六圓十二錢	同	議員招待晚餐費
一圓七十六錢	同	同時不足金補足
一圓	(十一月廿三日)	廢娼建議勸告並用箋各所へ郵送費
二圓四十五錢	同	同所用罫紙二十帖代
十五錢	(十一月廿八日)	同前追送郵稅
十二錢	(十二月一日)	東京府會廢娼建議文甲府群馬長野へ郵送代
一圓四十五錢	(十二月九日)	府會々議前長島操君奔走車代
合計		十三圓六十七錢五厘
差引現在金		八圓二十二錢五厘

東京廢娼會常務委員 告

● ◯ 脚氣患者諸君よ左の ◯ ●

廣告を讀んで世に名灸有るを知り玉はんことを

官許專門 天下無比 かつけ根切灸點術

附言輕症は一二度如何なる重病と雖ども四五度限り全治受合○灸治効能男女を論ぜずかつけは勿論腰より下の冷て痛む病に大効ある事受合論より證據實驗あれ○常時拙家近邊に類似の家號名乘る同業者出來たるに付番地家號篤と御注意の上陸續御來車あれ

京橋區本材木町三丁目二十一番地松屋橋通り

壽福堂

松村介石著

阿伯拉罕 倫古龍

定價廿五錢 郵稅四錢

目次○豪傑論○幼少の時代○青年の時代○其容貌○其智辨○其德行○其宗教○政治の時代(上)○代言の時代○政治の時代(下)○大統領の時代○其周圍と時勢○結論

立志之礎の著者、松村介石氏の新著、阿ブラハム倫コルン傳成る、夫れ立志の礎が如何に我國青年界を警動したるか、如何に我國青年諸君を輔益したるか、諸彥既に之を知る、然則今此新著の價値に於ては、著肆又敢て玆に呶々せず、唯其れ本傳なる著者が言說の意を寫し聊か以て廣告に代ふ、

夫れ倫氏は如何なる人ぞ、曰く、眇たる一貧子より、其身を興し、鳳翥龍變、遂に登て大統領となり、德光を八表に振耀し、偉業を萬世に樹立し、吾人をして今猶欽仰措く能はざりし者也其爲人たる如何、曰く、至誠一貫、光明正大、耿介脫俗、敏活奇警、愛腸慈眼、堅志豪意、度量宏濶、精神騰溢。即眞人物たる師標也然則阿ブラハム倫古龍は如何にして此等の品性を修養し得たるか、其訣如何、其途如何、曰く是れ即ち此傳記に詳あるところなり。左れば今日我國に在て兀々苦學する青年諸君よ來れ、來りて今此傳を見よ、同感の情に激せられ、勇氣必す百倍せん、其志望や卑近、其擧動や子々、俗を追ひ世に漂ふ朋友よ、來れ、來りて今此傳を見よ、曉然醒悟、後悔の涙堰きあへず、誓て高達を期するに至らん、然而て策士縱橫、才子片々、文學俗陋、正氣衰耗の我國を觀て、傾頭愁眉、至誠を推して立つ志士よ、來れ、來りて今此傳記を見よ、奮然蹶起、裳を搴て直に倫氏か蹤を追はんと欲する情念を振起して止まざるに至らん

●發行所○東京日本橋通三丁目丸善商社書店○大賣捌。同京橋區出雲町警醒社、同日本橋區大傳馬町二丁目大成館、同下六番町六番地女學雜誌社

發行所 東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社

編輯兼發行人 巖本善治

印刷人 堀口庄三

天賞堂時計發賣廣告

瑞西國シイベル、フレンワルド横濱新九十番商會専賣に係る時計の精巧堅牢なるは江湖の熟知せらるゝ處弊堂該懐中時計數十種中に就き左の入品を精撰し廣く之を發賣す

(金側)丁價六十圓十八金廿一形片硝子持出し付金針入龍頭卷懐中時計器械本ニッケル卷上げ弩向ひ爪左アンクル二番より惣石入●丙價七十圓同裏三枚蓋●乙價七十五圓同無雙●甲價九十八圓同裏三枚蓋●各器械構造概略圖の如し●東京市外遞送費廿錢●(銀側)丁價八圓片硝子廿一形金針入鍵卷懐中時計器械プラチナ滅金向ひ爪左アンクル●丙價十一圓半同龍頭卷向ひ爪右アンクル●乙價十五圓同本ニッケル卷上ゲ弩二番より惣石入●甲價廿一圓同七所金●各器械構造略圖の如し●東京市外遞送費廿錢

右時計は器械の堅牢なる弊堂が說明を待たざる處なり然れども特に御請求の分に限りて左の手續に從ひ正當の保險狀を呈すべし○保險を要せらるゝ場合は御購求の當時と既に御購求の後に在るとに拘らず各一個に付左の保險料を申受べし　一金側金五圓　一銀側金二圓○保險年限は金銀時計共二十箇年を以て限とす○保險年限中は特に諸器械及び硝子の破損修繕油さし磨き直しの手入は無代價とす○保險年限中自然器械の變化を生じ使用に堪へざる事あれば何時たりとも同種にして新規なる者と交換又は原價を返却すべし●保險の有無に拘はらず**御購求後三十日以內に限り交換又は原價の返戾しを要せらるゝときは其望に應ずべし**

今回又左の時計及時計附屬品洋服裝飾品各種を發賣す●但し時計は保險手續其他總て前文による

米國製

(金側)十八金廿一形無雙龍頭卷懐中時計甲價百五圓●同乙價九十五圓●同十四金甲價七十三圓●同乙價六十三圓●(銀側)同甲價廿圓●同乙價十六圓●同片硝子側十五圓●(金着側)同無雙甲價廿九圓●同乙價廿五圓

瑞西國製

(金側)十八金廿一形無雙懐中時計器械本ニッケル卷上げ弩向ひ爪左アンクル二番より惣石入價六十五圓●同十四金價四十九圓●同十八金裏三枚蓋乙價九十二圓●同甲價百十圓●同七曜及日指し付價百四十五圓●同コロノカラフ引打月の滿缺十二ヶ月七曜及日指し付價三百五十圓●(銀側)廿一形無雙裏三枚蓋金針入龍頭卷懐中時計器械本ニッケル卷上ケ弩向ヒ爪左アンクル總石爪石入價三十六圓●同片硝子右アンクル價廿九圓●同中硝子價廿六圓●同片硝子鍵卷懐中時計器械本ニッケル卷上ケ弩向ヒ爪左アンクル價十一圓●同惣石入價十五圓●同爪石入價十八圓●

貴婦人持時計

(金側)十八金十三形無雙龍頭卷懐中時計價廿九圓●同裏三枚蓋價四十五圓●同片硝子價十七圓半●同無雙金剛石裝飾付價六十六圓

時計附屬品

鎖及磁石寫眞入鉛筆其他各種

指環

黄金製見留印付及寶石入各種

洋服裝飾品

腕輪胸飾ヒン手ボタン其他各種

交詢雜誌評

○天賞堂の時計　尾張町二丁目の天賞堂より發賣する時計は米國製及び夙に時計の製作を以て世に有名なる瑞西國の製品にしてその器械の堅牢なることその構造の精緻なることその裝飾の美麗なること何れも世間の好評に違はざる眞品なり尚且購求後三十日以內は購買者の自由に之を取換又は返還することを得て望みに依れば二十箇年を限り之を保險しその年限中は無代價にて之を修復するよしなれば購買者の爲め更に一層の便利なりと云ふべし

東京日日新聞評

○天賞堂の時計　京橋區尾張町二丁目十八番地の天賞堂にて此程より發賣する金銀時計は歐米製造數千百種の中につき特に器械裝飾の善良完美なるものを撰擇せしものゝ由にて從來舶載の物に比すれば堅牢精緻なる同日の談に非ざるが如し殊に時計一個毎に丁寧親切なる心得書を添へ又二十年間の保險を附し購求後三十日以內は物品の交換原價の返却をも購客の望に任ずると云へば自然適意の品物を入手するを得べきなり猶前日來の廣告につき其詳細一覽あるべし

時事新報評

○天賞堂ノ時計　尾張町二丁目ノ天賞堂ニテ發賣スル時計ハ何レモ機械ノ堅牢ナルモノヲ撰ミ購求者ヘ取扱ヒ方心得書ヲモ與ヘ買取後三十日以內ハ交換或ハ原價ノ返却ヲモ求ムレハ其望ミニ應スルトノコトナリ

朝野新聞評

○天賞堂の時計　印刻を以て名ある尾張町二丁目天賞堂にて發賣する時計は各種の時計中に就き特に撰擇せしものにて在來の時計に比し機械も餘ほど堅牢精功なるに一個毎に取扱心得書を添へ且購求後三十日以內は都合に依り交換又は原價の返却を求むる時は其望みに應ずる由

郵便報知新聞評

○天賞堂時計　彫刻ニ有名ナル天賞堂(京橋區尾張町二丁目十八番地)ヨリ發賣スル時計ハ米國製或ハ瑞西國製ニシテ器械堅牢且ツ裝飾美麗ナルヲ以テ大ニ評判ヨク殊ニ購求後三十日以內ニ現物ガ氣ニ入ラヌ時ハ他品ト取換ヘ又ハ原價ヲ返戻スルヨシナレバ購客モ大ニ安心シテ買求メ望ミニヨリテハ保險ヲモ附シ其ノ年限內ハ器械及ビ硝子ノ破損等ノ修復ハ無代價ナリト云フ

日本人評

○天賞堂の時計　尾張町二丁目の天賞堂より發賣する時計は、歐米各種の製造品中より就き、特に器械の堅牢なるものを撰擇して、一個毎に丁寧なる取扱方心得書をも添へ、其上二十年間の保險を附するのみならず、購求後三十日間は、品物の變換、代價の返還さも凡べて其の望み通りに任かすと云へば、購買者に取ては至極便利なりと云ふべし

東京市京橋區尾張町二丁目十八番地

天賞堂

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

天賞堂時計發賣廣告

瑞西國シイベル、フレンワルド横濱新九十番商會專賣に係ろ時計の精巧堅牢なるは江湖の熟知せらろゝ處弊堂該懷中時計數十種中に就き左の八種を撰擇し廣く之を發賣す

（金側）丁價六十圓十八金廿一形片硝子持出し付金針入龍頭卷懷中時計器械本ニッケル卷上げ聲向ひ爪左アンクル二番より惣石入●丙價七十圓同裏三枚蓋●乙價七十五圓同無雙●甲價九十八圓同裏三枚蓋●各器械構造概略圖の如し●東京市外遞送費廿錢●（銀側）丁價八圓片硝子廿一形金針入鍵卷懷中時計器械ブラチナ滅金向ひ爪左アンクル●丙價十一圓半同龍頭卷同本向ニッ右アンクル●乙價十五圓同本ニッケル卷上ゲ聲二番より惣石入●甲價廿一圓同七所金●各器械構造概略圖の如し●東京市外遞送費廿錢

右時計は器械の堅牢なる弊堂が說明を待たざる處なり然れども特に御請求の分に限りて左の手續に從ひ正當の保險狀を呈すべし○保險を要せらるゝ場合は御購求の當時さ既に御購求の後に在るさに拘らず各一個に付左の保險料を申受べし　一金側金五圓　一銀側金二圓○保險年限は金銀時計共二十箇年を以て限さす○保險年限中は特に諸器械及び硝子の破損修繕油さし磨き直しの手入は無代價さす○保險年限中自然器械の變化を生じ使用に堪へざる事あれば何時たりさも同種にして新規なる者さ交換又は原價を返却すべし●保險の有無に拘はらず

御購求後三十日以內に限り交換又は原價の返戻と要せらるゝときは其望に應ずべし

今回又左の時計及時計附屬品洋服裝飾品各種を發賣す●但し時計は保險手續其他總て前文によろ

米國製

（金側）十八金廿一形無雙龍頭卷懷中時計甲價百五圓●同乙價九十五圓●同十四金甲價七十三圓●同乙價六十三圓●（銀側）同甲價廿圓●同乙價十六圓●同片硝子價十五圓●（金着側）同無雙甲價廿九圓●同乙價廿五圓

瑞西國製

（金側）十八金廿一形無雙懷中時計器械本ニッケル卷上げ聲向ひ爪左アンクル二番より惣石入價六十五圓●同十四金價四十九圓●同十八金裏三枚蓋乙價九十二圓●同甲價百十圓●同七曜及日指し付價百四十五圓●同コロノカラフ引打月の滿鈌十二ヶ月七曜及日指し付價三百五十圓●（銀側）廿一形無雙裏三枚蓋金針入龍頭卷懷中時計器械本ニッケル卷上ヶ聲向ヒ爪左アンクル總石爪石入價三十六圓●同片硝子右アンクル價廿九圓●同中硝子價廿六圓●同片硝子鍵卷懷中時計器械本ニッケル卷上ヶ聲向ヒ爪左アンクル價十一圓●同惣石入價十五圓●同爪石入價十八圓●

貴婦人持時計

（金側）十八金十三形無雙龍頭卷懷中時計價廿九圓●同裏三枚蓋價四十五圓●同片硝子價十七圓半●同無雙金剛石裝飾付價六十六圓

時計附屬品

鎖及磁石寫眞入鉛筆其他各種

指環

黄金製見留印付及寶石入各種

洋服裝飾品

腕輪胸飾ピン手ボタン其他各種

交詢雜誌評

○天賞堂の時計　尾張町二丁目の天賞堂より發賣する時計は米國製及び夙に時計の製作を以て世に有名なる瑞西國の製品にしてその器械の堅牢なるさその構造の精緻なるさその裝飾の美麗なるさは何れも世間の好評に違はさろ眞品なり向且購求後三十日以內は購買者の自由に之を取換又は返還するを得て望みに依れば二十箇年を限り之を保險しその年限中は無代價にて之を修復するよしなれば購買者の爲め更に一層の便利なりさ云ふべし

東京日日新聞評

○天賞堂の時計　印刻を以て有名なる京橋區尾張町二丁目十八番地の天賞堂にて此程より發賣する金銀時計は歐米製造數千百種の中につき特に器械裝飾の善良完美なるものを撰擇せしものゝ由にて從來舶載の物に比すれば堅牢精緻なる同日の談に非ざるが如し殊に時計一個毎に丁寧親切なる心得書を添へ又二十年間の保險を附し購求後三十日以內は物品の交換原價の返却さも購客の望に任ずるさ云へば自然適意の品物を入手するを得べきなり猶前日來の廣告につき其詳細一覽あるべし

時事新報評

○天賞堂ノ時計　尾張町二丁目ノ天賞堂ニテ發賣スル時計ハ何レモ機械ノ堅牢ナルモノヲ撰ミ購求者ヘ取扱ヒ方心得書ヲモ與ヘ買取後三十日以內ハ交換或ハ原價ノ返却ヲ求ムレハ其望ミニ應スルトノコトナリ

朝野新聞評

○天賞堂の時計　印刻を以て名ある尾張町二丁目天賞堂にて發賣する時計は各種の時計中に就き特に撰擇せしものにて在來の時計に比し機械も餘ほど堅牢精功なるに一個毎に取扱心得書を添へ且購求後三十日以內は都合に依り交換又は原價の返却を求むる時は其望みに應ずる由

郵便報知新聞評

○天賞堂時計　彫刻ニ有名ナル天賞堂（京橋區尾張町二丁目十八番地）ヨリ發賣スル時計ハ米國製或ハ瑞西國製ニシテ器械堅牢且ツ裝飾美麗ナルヲ以テ大ニ評判ヨク殊ニ購求後三十日以內ニ現物ガ氣ニ入ラヌ時ハ他品ト取換ヘ又ハ原價ヲ返戻スルヨシナレバ購客モ大ニ安心シテ買求メ望ミニヨリテハ保險ヲモ附シ其ノ年限內ハ器械及ビ硝子ノ破損等ノ修復ハ無代價ナリト云フ

日本人評

○天賞堂の時計　尾張町二丁目の天賞堂より發賣する時計は、歐米各種の製造品中より就き、特に器械の堅牢なるものを撰擇して、一個毎に丁寧なる取扱方心得書をも添へ、其上二十年間の保險を附するのみならず、購求後三十日間は、品物の變換、代價の返還をも凡べて其の望み通りに任かすさ云へは、購買者に取ては至極便利なりさ云ふべし。

東京市京橋區尾張町二丁目十八番地

天賞堂